國語讀本

新制版

巻六

42
810
昭8

41497
教科書文庫
4
810
41-1933
20000
65655

資料室

昭和八年二月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

國語讀本 卷六

新制版

文學博士 上田萬年
榮田猛猪 共
鹽野新次郎 編

広島大学
教
65655
図書

40
810
明8

國語讀本 卷六

目次

前篇

一 楠公精神の顯揚　中村孝也　一
二 人臣の道　北畠親房　一四
三 鹽原　尾崎紅葉　一九
四 勞働　島崎藤村　二五
五 芒　小島烏水　二九
六 月の洞庭湖　佐佐木信綱　三三
七 蘭學事始　杉田玄白　三八

八 洋學の移入　野上豐一郎　五〇
九 空行く雁（曾我物語）　五八
一〇 曾我五郎　森鷗外　六二
一一 白峰の陵　上田秋成　七六
椿說弓張月　瀧澤馬琴　七九
一二 夜長　八〇
一三 人の問に答ふ　藤田東湖　八二
一四 いのりなほし（吉野拾遺）　八八
一五 蟹山伏（續狂言記）　九二
一六 待賢門の戰（平治物語）　九八

一七 平重盛論　高山樗牛　一〇八
一八 若國日本　一一六
一九 上海の戰蹟　岡野養之助　一一九
二〇 梅花の氣品　豐島與志雄　一二七
二一 自然の愛好　藤岡作太郎　一二九
二二 國史に還れ　德富蘇峰　一四二

後篇

太平記抄
太平記に就いて（參考）　萩野由之　一
一 俊基朝臣再び關東下向の事　五

二　主上笠置を御沒落の事　一〇
三　備後三郎高德が事　一三
四　大塔宮熊野落の事　一六
五　吉野城軍の事　二〇
六　千劍破城軍の事　二五
七　正成兵庫に下向の事　三四
八　正成兄弟討死の事　三八
九　主上崩御の事　四三
一〇　正行吉野に參る事　四六

目次終

國語讀本　卷六

前篇

一　楠公精神の顯揚

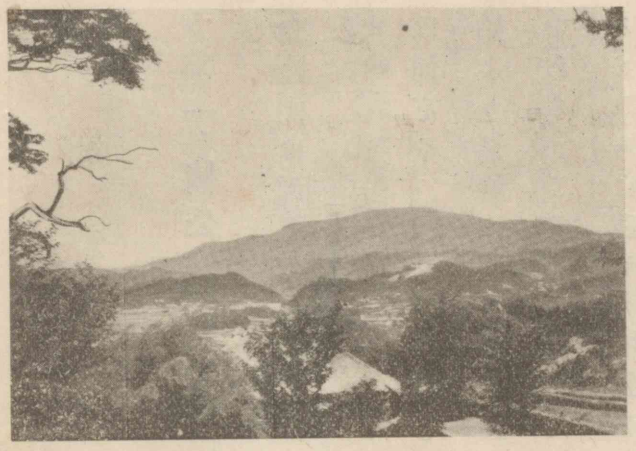
中村孝也

群馬縣の人。國史家。文學博士。史料編纂官。東京帝國大學助教授。

金剛山　大阪府（河內）南河內郡葛城山の一峯。

金剛山は天下の靈山である。これをして靈山たらしめるものは、實に全山に磅礴たる楠公精神の致すところである。楠公精神とは何ぞや。曰く、謂ひ難し。そは實に大天大地の間に遍滿して、無始より無終に亙り、天下國家と共に永遠に存在する大生命のことである。この大生命がたまたま人の形をとつて具象化せられたるところに、我が大楠公が出でられたのである。宜なり、公は彗星の突如として天の一角に現はれる如き奇蹟的な出現を以て、歷

史の舞臺に躍出しつゝ、前後僅かに六箇年の短日月において、人類精神の最高調に達せるときのあらゆる精華を發揚し、而して窈然として時限の大空の彼方に消え失せたることや。しかも、その光芒は燦爛として全宇宙を照破し、歳月の流るゝと共に益精采を加へ、その體現せる大精神は、今において最も健全なる指導精神として國民の上に臨んでゐる。この大精神を闡明して、之を徹底せしめることの如何は、實に國家民生の休戚に關すること大である。



金剛山

文王　名は昌。殷の紂王の時、西伯に封ぜられ諸侯の人望を得た。

九月　元弘元年。

笠置山　京都府（山城）相樂郡木津川の南岸に聳える岩山。

余は金剛山頂に立つて、特にこの感を深うしたのである。

公の出現は實に奇蹟的であつた。多くの研究家は、公の祖先を明かにし、その門地を高くしようと努めてゐる。然り、努めてゐる併しながら、努めて漸くにして知り得ることが之を證明する如く、公の祖先と門地とは、それほど顯著なものではなかつた。それで宜いのである。文王を待つて起るならば、凡庸の士も之を能くするであらう。英俊の士は文王無しといへども能く起るのである。公は實に文王を待たずして起り得た。

九月、後醍醐天皇の召命を奉じて、笠置山上の行在所に參向する以前における公は、果してどれだけの社會的重量を有してゐたのであらうか。而も自ら持すること最も重く、武略と智謀との效果

を述べて、「合戰の習にて候へば、一旦の勝負をば必ずしも御覽ぜらるべからず。正成一人未だ生きてありと聞召され候はば、聖運つひに開かるべしと思召され候へ。」と賴もしげに言上し、賴山陽をして、「夫れ一兵衞尉を以てして、居然として天下の重きを以て自ら任ず。」と驚歎せしめたのは抑、何に因るのであるか。豈たゞに聖主の値遇に感激して、身を以て國に許したるに止まらんや。公は實に自己の智略と、修養と、人格と、信念とに、自ら絶對の信任を置かれたのであつた。

自ら信ずる力は絶對不可抗の力である。公は自己の道德的信念に全幅の信賴を託して而して起つた。されば公の進退行藏には、疑懼なく、逡巡なく、前後一貫、明朗透徹、殆ど人界を絶する高調を呈してゐる。されば公の六箇年の生命、詳しくいへば僅かに四箇

賴山陽　江戸時代の儒者。安藝の人。天保三年（一八四二）歿、年五十三。

一兵衞尉を以て云々　「日本外史」楠氏論贊の語。兵衞尉は兵衞府の役人で兵衞佐に次ぐ。

年九箇月の短い歳月において、建武中興を翼贊しまゐらせた建設的事業は、一朝にして瓦解し、純忠至誠、空しく一命を鋒鏑の下に殞し、雄志蹉跎恨みを千歳の末に殘されたのであつたが、七生報國の念願空しからず、その高風を慕ひ、その遺志を繼承して、君國のために盡すもの相踵いで起つてゐる。即ち楠公は死して而して死せず、高潔至純なる精神は、天地と共に永遠に存するのであつて、流風遺韻、長へに人心を感發せしめずんば已まないのである。

仁者は敵なし。楠公には、生前死後において、眞の敵がなかつた。その生前においては、敵にも味方にも敬愛せられたのであるから、即ちこれ無敵である。況んや死後においてをや。憎惡の眼を以て公を見るものは、古今一人も無いのである。「梅松論」は足利方の

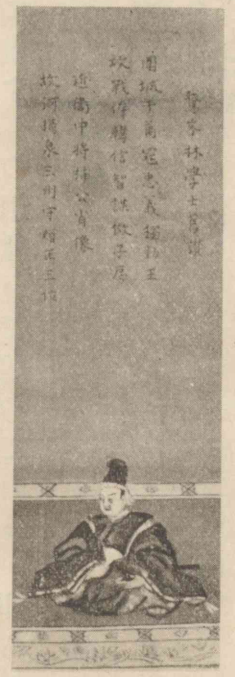
諸公は皆武をもつて
を手段とし一方は
は仁義をもつて
ばせ人はそれぞれ
であるが
あれは深い人は敵対する人がなくなる。

仁者は敵なし　王往而征之、夫誰與王敵。故曰、仁者無敵。王請勿疑。（孟子梁惠王上篇）

梅松論　足利氏を謳歌した文學。作者不詳。貞和四年（一三〇九）頃の作。

著書であるが、湊川における公の陣歿を敍して、「誠に賢才武略の勇士とは、かやうの者をや申すべきと、敵も味方も惜まぬ人ぞなかりける。」と讃歎してゐる。「太平記」によれば、足利尊氏は、公の戰死を愛惜し、その首級に對して最大の敬意を表し、禮を厚うして之を故郷に送還したのである。

太平記
室町時代に出た軍記物語。後醍醐天皇御即位より後村上天皇の御代までを記す。



楠木正成

敵將を殪せば、それを梟首して散々侮辱を加へるのは武家の慣習であつた。而も歴史は楠公において、その除外例を示してゐる。公の德性が如何に世人に尊重せられたかを推知するに餘りがある。

若し夫れ「太平記」における楠公禮讃の記事が、世道人心に及ぼせ

る影響は殆んど測り知ることが出來ない。無名の筆者は、公の智謀については、「正成は元來、籌を帷幄の中にめぐらし、勝つ事を千里の外に決せんと、陳平・張良が肺肝の間より流出せるが如きの者なり。」と讃へ、その最期については、「抑、元弘より以來、忝くも此の君に憑まれまゐらせて、忠を致し功に誇るもの幾千萬ぞや。然れども、此の亂また出で來て後、仁を知らぬものは、朝恩を捨てゝ敵に屬し、勇なきものは、苟も死を免れんとて、刑戮にあひ、智なきものは、時の變を辨ぜずして道に違ふことのみありしに、智仁勇の三德を兼ねて、死を善道に守るは、古より今に至るまで、正成ほどのものは未だ無かりつるに、兄弟共に自害しけるこそは、聖主再び國を失ひて、逆臣ほしいまゝに威を振ふべき其の前表の驗なれ。」と評論し、智仁勇三德兼備の大人格として、高く之を雲表に標置してゐる。殊に公の

陳平
漢朝創建の功臣。孝文帝の二年に歿。

張良
漢朝創建の功臣。字は子房。惠帝の六年歿。

戰歿を以て、時局轉回の重要なる樞機であると論ぜる見解は、公に寄託することの最も重大なものであつて、是は公の地位や權勢の上から立論せるものではなく、全くその人格と信念との上から斷定せるものである。この重大なる寄託あるが故に、公が櫻井驛において、その子正行に遺訓を與へ、之を河内に歸らしめたことが、更に一層の意義を加へるのである。

櫻井驛　大阪府（攝津）三島郡島本村。

櫻井驛における楠公父子の訣別は、理あり、情あり、義あり、涙あり、東西古今に亙り、筆舌を絶せる無韻の大詩篇である。楠公精神は、この大詩篇を通じて、ひとり楠公の一代のみならず、楠氏の歷世を貫流し、更に汪洋として全國土に溢れ漲るに至つた。山陽が「其の死に臨んで子を戒むるを觀るに、また曰く、吾れ死せば天下悉く足

利氏に歸せんと。夫れ天下の爲すべからざるを知りて、猶その子孫を留めて天子を衛る。その心を設くるや、古の大臣といへども、何を以てか遠く過ぎん。」と論じ、また「子孫能く其の遺訓を守り、正統の天子を彈丸黑子の地に護り、以て四海の寇賊を防ぐこと、四朝五十餘年の久しきに及び、一門の肝腦を擧げて、これを國家の難に竭す。其の溯盡灰滅するに至つて、しかる後に足利氏はじめて大いに其の志を天下に成すを得たり。」と論じたのは、卽ち楠公精神の存するところ、君國を危くする力をして跳梁跋扈の機會を得ざらしめることである。

四朝　後醍醐・後村上・長慶・後龜山。

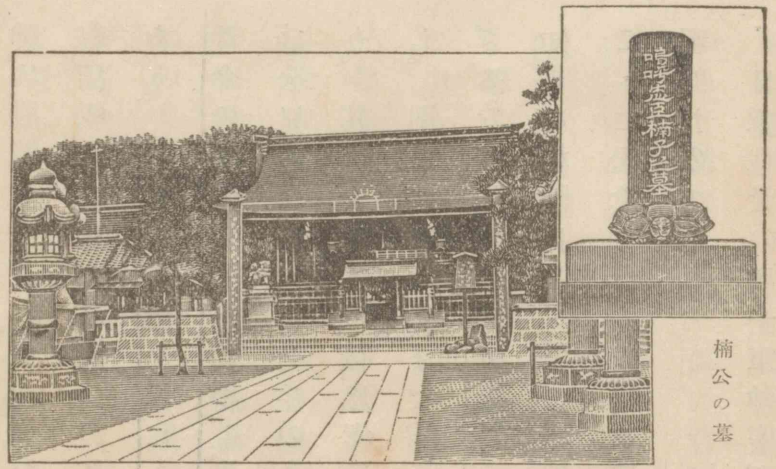
頼山陽

鳥の云々

曾子曰、鳥之將ニ死ルトスルヤ、其鳴ク也哀シ、人之將ニ死ルトスルヤ、其言ヒ也善シ。（論語泰伯篇）

鳥の將に死なんとするや、その聲悲し。人の將に死なんとするやその言宜し。湊川の戰敗れて、楠公兄弟は、「在家（自宅）の一むらありける中に」走り入つて最後の決意をなした。公は從容として舍弟正季に向つて、「抑、最期の一念に依つて善惡の生を引くといへり。九界の間に、何か御邊の願ひなる。」と問ふ。正季はからく〳〵と打笑つて、「七生までたゞ同じ人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存じ候へ。」と答へる。正成は莞爾として笑ふ。「罪業深き惡念なれども、我もかやうに思ふなり。いざさらば同じく生を替へて、この本懷を達せん。」と誓ふ。そして兄弟共に刺違へて斃れる。純忠至誠、壯烈鬼神を奧かしめるものは、實にこの場の光景であつた。

楠公兄弟七生滅賊の一語は、實に天來の神韻であつた。それは



楠公の墓

湊川神社

決して通常人界の言葉でない。それは我が建國創業以來、磅礴として國民の胸裡に充滿せる道德的信念が、時に觸れて發した美しい火花の閃光であつた。それは實に最高至極の臣道を敎示して、千秋萬古、不朽の光輝を發揚せるものであつた。されば天下後世、この語を耳にするもの、貪夫も廉に、懦夫も亦案を拍つて起たずんばあらず。爲に千百無數の小なる楠公が、全國土に續出しつゝある。一語砭の如し。楠公精

吉田松陰　名は寅次郎。幕末の志士。長門藩士。安政六年（一八五九）刑死、年二十九。

廣瀨中佐　名は武夫。明治三十七年旅順港口に於て戰死。年三十七。

神は、凝縮してこゝに比類なき尖鋭さを示してゐる。幕末の志士吉田松陰は、三たび楠公の墓を拜して、感激日に月に新たなるものあり。時を隔て、處を異にして、公と自己との間に脈々たる一道の生命の貫流するを體得し、茲に楠公不死論を打開するに至つた。

「楠公兄弟は、たゞに七生のみならず、初めより未だ嘗て死せざるなり。其れより其の後、忠孝節義の人、楠公に觀て興起せざるものなし。則ち楠公の後、また楠公を生ずるもの、固より計り數ふべからざるなり。何ぞ獨り七生のみならんや。」と論じ來るところ、孰んぞ知らん、松陰自身すでに卒然として楠公たることを。楠公精神はこゝに松陰といふ人格を通じて、幕末の天地に、再び燦たる光彩を現じたのであつた。

日露戰役の勇士、軍神廣瀨中佐が、七生報國を期し、笑を含んで死地に就いたのは、また楠公の遺烈の表現である。ひとり廣瀨中佐のみと言はんや。眞に君國を思ふものは、悉く楠公の再生と見ることが出來ないであらうか。

思ふに楠公は、歷史あつて以來、最も正しき日本人の典型であつた。最も純眞なる日本人であつた。一切の日本人は、皆楠公と同一なる思想と感情と信念とを有してゐるのであるが、それが屢、他に誤られて不純に陷ることのあるは遺憾に堪へないことである。その中において純正純眞なるものが卽ち我が楠公となつて現れたのであるから、楠公は最も洗煉せられたる我等であり、我等は最も素朴なる楠公であつて、兩者決して別個の系統のものではない。我等も亦自ら修養することによつて、悉く楠公たり得る素質を有

してゐるのである。楠公の不朽なる所以は、また實に此處に存する。（歴史と趣味）

二　人臣の道

北畠親房

およそ王土に生まれて、忠をいたし命を棄つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵ましし、その迹を哀みて、賞せらるゝは、君の御政なり。下として、きほひ爭ひ申すべきにあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望を致すこと、みづから危むる端なれど、前車の轍を見ることは、誠にあり難き習なりけんかし。中古までも、人の、さのみ豪强なるを、ば戒められき。豪强になりぬれば、必ず驕る心あり。果して、身を滅ぼし、家を失ふためしあれば、戒められしもことわりなり。鳥羽院の御代にや、「諸國の武士の、源平の家に屬する事をとどむべし。」といふ制符たびたびありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は、宣旨を賜はりて諸國の兵を召し具しけるに、近代となりて、やがてかたらはるゝ輩多くなりしによりて、この制符は下されき。果して、今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりにけり。

この頃よりのことわざには、一度軍にかけあひ、或は家子郎從、節に死ぬるたぐひもあれば、「わが功におきては日本國を賜へ、もしは半國を賜はりても足るべからず。」など申すめる。誠にさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、又朝威の輕々しさもおし量らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも、君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬ

前車の轍
前車覆、後車戒。（漢書）

鳥羽院
御名は宗仁。保元元年（一一五六）崩御、寳算五十四。

言語は言行君子之樞機、樞機之發、榮辱之主也。（易經）

堅き氷は履レ霜堅氷至ル。（易經）

堯　支那上古五帝の一。

許由・巢父　共に支那古代の隱者。

潁川　支那河南省。

阿部野神社（挿圖）　大阪市住吉區住吉町にある。北畠親房・顯家父子を祀る。

事にこそ。堅き氷は霜を履むより至るならひなれば、亂臣・賊子といふものは、そのはじめ心詞を愼まざるより出でくるなり。世の中の衰ふと申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改まるにもあらず。人の心の惡しくなり行くを、末世とはいへるにや。昔、許由といふ人は、帝堯の、國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて渡らず。その人の五臟六腑のかはるにはあらじ。能く思ひ習はせる故にこそあらめ。

阿部野神社

なほ、行末の人の心、思ひやることこそあさましけれ。大方おのれ一

將門　平氏。朱雀天皇の頃下總猿島に據つて反した。

蕭何　高祖に仕へて常に軍の糧食を主る。後相國となる。

韓信　高祖に仕へて百戰常に勝つたが後高祖に忌まれて殺された。

身は恩に誇るとも、萬人の怨を遺すべきことをば、などか顧みざらん。君は、萬姓の主にてましませば、限ある地をもちて、限なき人に頒たせ給はんことは、推して量り奉るべし。もし一國づつを望まば、六十六人にて皆塞がりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悅ぶとも、千萬の人は喜ばじ。況や日本の半を心ざし、皆ながら望まば、帝王はいづくをしらせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出し、面にも羞づる色のなきを、謀叛の始とはいふべきなり。昔の將門は、比叡山に登りて大内を遠見して謀叛を思ひ企てけるも、かゝる類にや侍りけん。昔は、人の正しくて、自ら將門に見も懲り、聞きも懲り侍りけん。今は人の心かくのみなりにければ、この世は愈、衰へぬるにや。

漢の高祖の天下を取りしは、蕭何・張良・韓信が力なり。これを三

傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は、高祖、之を師として、「籌を帷幄の中に運らして、勝つことを千里の外に決するは、この人なり。」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて、すこしきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣多く亡びしかど、張良は身を全くしたりき。近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討ちしに、みづから向ふことありしに、平重忠が、先陣にて、その功勝れたりければ、五十四郡の中、いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて極めたるすくなき所を望み賜はりけりとぞ。これは、人に、ひろく、賞をも行はしめんがためにや、賢かりけるをのこにこそ。又、直實といひける者に、一所を與へ給ふ下文に、「日本第一の剛の者なり。」と書きて賜はりけり。一聞する人のありけるに、「褒美の詞の甚

留　今江蘇省沛縣の東南。

文治の頃　文治五年七月（一八四九）。

泰衡　藤原氏。秀衡の子。

平重忠　畠山氏。頼朝の功臣。

長岡の郡　今宮城縣遠田郡の内二三村を含む。

直實　熊谷氏。

しきに、與へたる所の少き、まことに名を重くして利を輕くしける、いみじき事。」と、口々に譽めあへりけり。いかに心得て譽めけんと、いとをかし。これまでの心こそなからめ、事に觸れて君をおとし奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變り果てぬ。公家のふるき姿もなし。いかになりぬる世にかと、歎き侍るともがらもありと聞えき。（神皇正統記）

三　鹽　原

尾崎紅葉

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、我はかはらざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間のひとりに倦み疲れつゝ、はじめて、西那須野の驛に下車せり。

直ちに、西北に向ひて、今尚茫々たる古の那須野ケ原に入れば、天

鹽原　栃木縣鹽谷郡鹽原溫泉。

尾崎紅葉　名は德太郎。小說家。東京の人。明治三十六年歿、年三十七。

西那須野の驛　栃木縣那須郡太田原の西にある奥羽線の停車場。

那須野ケ原　栃木縣那須郡三島村及び太田原から磐城の國境に至るまでの大原野。

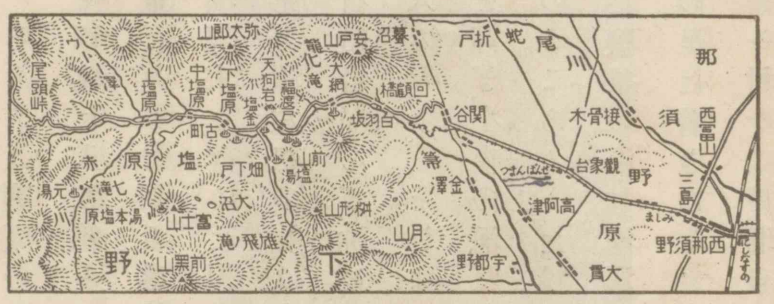
は闊く、地は遐かに、たゞ、平蕪の迷ひ斷雲の飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて、行くほどに、路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くる處に、淙々の響ありて、これに架れるを入勝橋となす。

關谷村
栃木縣鹽谷郡箒根村の字。

尾崎紅葉

輙ち橋を渡りて、僅に行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷かに、壑深く陷りて、いくめぐりせる九折の、後には密樹に聲々の鳥呼び、前には、幽草、歩々の花をひらき、愈、登れば、遙かに木がくれの音のみ聞えし流の水上は、淺く見はれて、すはやこゝに、空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかと、すさまじかり。道の右は山を剉りて長壁となし、石幽に、蘚碧う

この緒よりや
琴の音に峯の松風
かよふらしいづれ
の緒よりしらべそ
めけむ（拾遺集、
齊宮女御）



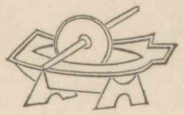
鹽原附近

して、幾條とも白絲を亂し懸けたる細瀧小瀧の珊珊として灑げるは、嶺上の松の調も、定めてこの緒よりやと見捨て難し。

俥を驅りて白羽阪を踰えてより回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は、始めて奇なり。これより行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋。山あれば、巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なほ數ふれば十二勝、十六名所、七不思議、一々探り得べき。

そも〳〵鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて、深く西北に入り、綿々として箒川の流に泝る片岨の、四里に岐れ、十一里に亙りて、到る處巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に、瑠璃末を碎くに似たり。まづ大網の湯を過ぐれば、根本山・魚止瀑・兒ケ淵・左靱の嶮は古りて、白雲洞は朗かに、布瀑龍ケ鼻・材木石・五色石・船岩なんど、眺め行けば、鳥井戸・前山の翠、衣に染みて、福渡の里に入るなり。それより、前面に幾百仞の巨巖嶙峋たる天狗岩の奇勝を仰ぎ、小夜の河原の激湍に、怪石の磊砢たるを俯瞰し、途すがら崖のところ〴〵に咲殘りたる躑躅・山藤などうち眺めつゝ行くほどに、鹽釜の湯・甘湯澤・小太郎ケ淵などはやくも過ぎて、いつか畑下戸の里に着きぬ。

箒川
源を高原山に發し西南流して那珂川に合する。



福渡の里
大網より約三粁。鹽原溫泉中第一の繁華の地。

一村十二戸、溫泉は五箇所に涌きて、五軒の宿あり。こゝに、清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨み、俯しては、水石の粼々たるを弄び、仰げば西に富士・喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落ちくる流は、二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂れたる如き吉井瀑あり。東北は山また山を重ねて、琅玕の玉簾ふかく、夏日の畏るべきを遮りたれば、四面遊目に足りて丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮め、またあるまじき清福自在の別境なり。

鹽原

富士
鹽原富士。箒川の右岸にある。喜十六鹽原富士の西に連る山。

我はこの繪を看るごとき清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき

巖と激しき流との爲に、幾度か魂飛び肉消して、理むる方なくかき亂されし胸のうちは、藹然として頓に和ぎ、恍然として、すべて忘れたり。

まことに、よくこそ、我は來つれ。何ぞ來るの甚だ遲かりし。山の麗しといふも壤の堆きもののみ、川の暢けしといふも水の逝くに過ぎざるを、牢として拔くべからざる我が半生の痼疾は、いかでか壤と水との醫すべきものならんと、齒牙にも懸けず侮りたりしおのれこそ、まづ侮らるべき愚の者ならずや。

見よ〳〵、木々の綠も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、そばだつ巖も、吹來る風も、日の光も鷄の啼く音も、空の色も、皆おのづから浮世のものならで、我はこゝに憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身は彼の雲と輕く、心は水と淡く、希はくは、今よりかくの如くにして我が生を了らんかな。（紅葉全集）

島崎藤村
長野縣の人。名は春樹。詩人。小說家。

四 勞働

島崎藤村

朝はふたゝびこゝにあり、
朝はわれらと共にあり。
埋れよ眠、行けよ夢、
隱れよ、さらば小夜嵐。

諸羽うちふる鷄は
咽喉の笛を吹鳴らし、
けふの命の戰鬪（たゝかひ）の
よそほひせよと叫ぶかな。

野に出でよ、野に出でよ、
稲の穂は黄にみのりたり。
草鞋とく結へ、鎌も執れ、
風に嘶く馬もやれ。

雲に鞭うつ空の日は
語らず言はず聲なきも、
人を勵ます其の音は
野山に谷にあふれたり。
流るゝ汗と膩この

落つるやいづこ、かの野邊に
名も無き賤のものゝふを
來りて護れ、軍神。

野に出でよ、野に出でよ、
稲の穂は黄にみのりたり。
草鞋とく結へ、鎌も執れ、
風に嘶く馬もやれ。

あゝ綾絹につゝまれて
爲すよしも無く寢ぬるより、
薄き襤褸はまことふとも、

活きて起つこそかしこけれ。

匍匐ふ蟲の賤が身に
翼を惠むものや、何。
酒か、涙か、歎息か、
迷か、夢か。皆あらず。

野に出でよ、野に出でよ、
稻の穗は黃にみのりたり。
草鞋とく結へ、鎌も執れ、
風に嘶く馬もやれ。

（藤村詩集）

小島烏水
名は久太。高松の人。横濱正金銀行員。紀行家。文藝家。

評論家

五　芒

小島烏水

芒は土地の原始時代を代表するものである。少くとも月桂樹が榮光の標章となつてゐる如く、橄欖の葉が平和の幟牌となつてゐる如く、これといふ見どころのない、此の禾本科の一植物は、洪荒の宇宙を拓いて、そこに先づ自己が植民地を作り、それから後、人を呼んで、各人各時代の意匠にまかせて歷史を描かせ、自分はその歷史の中心から遠のいて、輪郭だけを作つてゐるやうに思はれる。

芒と連想して、何人も想ひ起すのは、武藏野の原始的風光であらう。言ふまでもないが、東京市の前身なる江戸が、なほ殼中に包まれてゐた時の外皮は武藏野で、武藏野の全身に毛髮となつて被つてゐたものは芒であつた。

關八州　關東八州。箱根以東、利根川系に屬する八箇國。

三浦・和田……　三浦以下皆平家の支族。

芒

芒は平原を第一番に占領した主人である。芒の在るところに人間の原始あり創造がある。古今幾千歳、人類興亡の歴史が平原史であるとすれば、平原史の表紙に描くべきものは、先づ芒であることを忘れてはならない。殊に關八州の歴史は皆然りで、所謂阪東武者なる三浦・和田・秩父・北條・千葉・上總などの「いたづらッ兒」は、皆芒が吐き出した産物である。

けれども芒は又同時に、衰亡史にも終焉記にも伴ふことを加へておかねばならぬ。野晒しの髑髏のくぼんだ眼から、一二本芒が出てゐたり、廢寺の床から芒の穂のそよいでゐたりする光景は、吾人が繪畫で見て幼少から震慄を以て迎へた宿題である。芒は零落性の秋を代表し、秋の草を代表し、秋の草になべてありがちの寂しく悲しいといふ特徴を代表してゐる。萩があつても、女郎花があつても、ひとり芒がないと秋にならない、秋の平原にはならない、秋の寂寥を磅礴させない。常盤木の松があつても、柏が茂つてゐても、二三本の芒さへあれば秋になる、寂寥といふ感じを起させる。されば芭蕉は骸骨の能する畫に「稲妻や顔のところが芒の穂」と題した。顴骨の高くなつた禿山に芒あり、雙頰の削り落された荒野に芒あり、總じて血色を失つた不毛の土地には芒を見るものである。

シムボル Symbol. 象徴。

かういふと芒は「廢亡」や「零落」や「絶滅」にゆく戸牖の飾として、自然が意匠したシムボルのやうである。墓前の樒の如くに！　嗚呼ばう〳〵として針の如く尖り、刄の如く冷たき芒よ。爾はもろもろの不祥を包藏する大藪林なるか。さらば余は爾を忌まねばならぬ。げに芒が一本ぬッと立つてゐるところは、亡國を豫言する老巫女のやうに氣味がわるい。

是に於て知る、芒は人間と天然と接觸するを待たんが爲に發生する燧火的植物である。芒のあるところ、水は冷寒、土は暗冥、人間の勞働勤勉が自然と競爭して摩擦熱を發すると、芒はこの熱の爲に銷鎔される。卽ちおのれは地圖から跡を滅して、人の取つて代るにまかす。要するに芒は土地の「原始」を潤色し、又併せて人間の「終局」を修正する役を有する一種の標章的植物である。（山水美論）

佐佐木信綱　伊勢の人。歌人。國文學者。文學博士。

岳州　支那湖南省岳陽縣。

蘆のまろ屋　夕されば門田の稻葉おとづれて蘆のまろやに秋の風吹く（金葉集、源經信）

六　月の洞庭湖

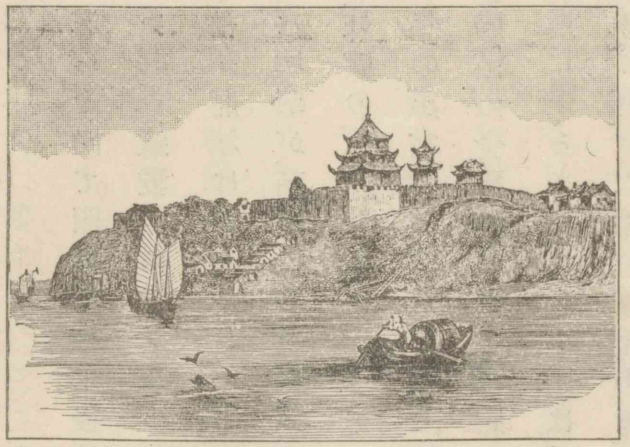
佐佐木信綱

漢口を出て四日目の午後、道人磯・城陵磯を過ぎて、船は岳州府についた。遠淺なので、岸を少し離れてとまつた。

岳州府城は、小高い丘の上にあつて、幾千の人家を包んだおごそかな城壁が、高い崖の上をめぐつてゐる。岳陽樓は、城壁の東の方に、鼓樓のやうな風に建つてゐる三層樓である。城壁の甎瓦が幾百年の風霜に黑ずんでゐるのに、建て直してさばかり久しからぬ岳陽樓の金碧燦爛たる色彩の配合が、極めて美觀である。

岸に上ると、岸邊の小屋は「蘆のまろ屋」ともいふべく、蘆でかまぼこ形に葺いた低い家である。否、家とはいひがたい、人が這つて入る程で、一二疊位の廣さの中に親子夫婦住んでゐる。やゝ大きく

て、前に卓がおいてあるのは煙館――風待の船頭らが鴉片を貪り飲む家である。これらの小家は、減水期の間だけのもので、水が增せば岸まで水が滿ちる爲、とり崩して他へ移るさうである。さういふ小家の間を通りぬけて、高い石磴をあがり、城門をぬけて岳陽樓へ上つた。案内の僧に導かれて、壁に題した詩や聯の句などを讀んで三層樓の上にあがつた。



岳陽樓

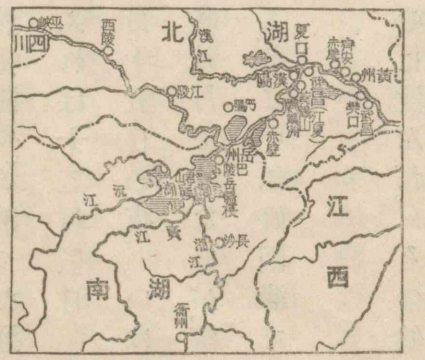
かの范文正公がこゝの記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り世は遷つても、天然の景には

范文正公　宋の宰相范仲淹の謚。仁宗の皇祐四年（一七二）歿。

浩々湯々　銜ニ遠山一、呑ニ長江一、浩々湯々、横無ニ際涯一。朝暉夕陰、氣象萬千。此則岳陽樓之大觀也。（岳陽樓記）

變りがない。たゞ見る浩々湯々、洞庭湖は目の前に天地の大幅をひろげてゐる。湖の門戸には、かの堯の女娥君がゐたといふ君山が右に、扁山が左に――いづれも吾が相模なる江の島ぐらゐの大きさで、安房なる鏡が浦の沖の島・鷹の島を那古の觀音の方から見た位置のやうに並んで、さながら洞庭宮を守る獅子狛犬の如くである。其のただ中に今や夕日は沈まうとしてゐる。この天地の大觀にひたつて、人をも我をも全く忘れてゐたが、同行の友に促されて樓を下り、船に歸つた。

幸に風は追手。帆を一ぱいに張つて、いよ〳〵洞庭湖に入らう



湖附近

とする。夕日は二つの島の間に落ちて、見る〳〵紅の眞玉が湖心に沈む。顧みれば岳州府城の上に月がのぼる。漢口領事であつた山崎犁雲が、「洞庭八百里。月照岳陽城。」と歌つた通りである。日を數ふれば十二月三日――あたかも舊曆十月十五日の夜。いはゆる瀟湘八景の洞庭秋月ではないが、望月の夜洞庭を過ぎる、何といふ好因緣であらう。

洞庭湖

夕日は遂に湖心に沈んだ。その餘光が空に輝くや、空の色忽ち紅に變じ、その紅の色が湖上に映じてゐる。その中を、一帆また一帆、風のまにま

瀟湘八景
平沙落雁
遠浦歸帆
山市晴嵐
江天暮雪
洞庭秋月
瀟湘夜雨
遠寺晚鐘
漁村夕照

に遠く近く、且顯はれ且消える。かういふ風景の中につゝまれながら、湖の底ふかく沈んだならばなどと思ふのであつた。

美くしかつた夕映も光を失つて、湖の上は薄暗くなる。暗くなる。月はいよ〳〵澄みのぼる。見えるものは唯こがね白がねの涙。「皓月千里、浮光躍金。」といふ有樣である。廣い果知らぬ湖の上を進みゆく我が船の近くに、二三の釣舟がゐる。むかし卓彥恭が洞庭を過ぎた時、月下に漁りせる小舟を呼びとめて、「魚ありや否や。」と問うたに、老人らしい聲で、「魚はないが詩がある。」彥恭喜んで、「願はくは一篇を聞かん。」老人枻を鼓つて、「八十滄浪一老翁。蘆花江上水連空。世間多少乘除事。良夜月明收釣筒。」と高吟し去つたといふ。さる風流の漁翁ありや否やを知らぬが、二三の小さな釣舟が、この大いなる湖の月夜の景趣を添へてゐる。

皓月千里
范仲淹の「岳陽樓記」の句。
卓彥恭
宋の人。

月は良く風は追手。船は帆腹飽滿、一瞬千里の勢で進む。夜はふける。月はいよ〳〵澄む。此の意、人の識るなし、何ともいひ難い感が胸にみちて、我が身そゞろに我あるを知らず、この隈なき月と果なき湖とに對してをつた。一昨年の初秋富士に登り、絶頂に見た七月十七夜の月。かれは山頂、これは湖上。しかもあはれは同じあはれで、風月の緣に富むことを天に謝したのであつた。

（信綱文集）

杉田玄白

七　蘭學事始

杉田玄白

頃は三月三日の夜と覺えたり。時の町奉行曲淵甲斐守殿の家士得能萬兵衞といふ男より、「明日手醫師何某といへる者、千住骨ヶ原にて腑分いたす由なり。御望あらば、かしこへ罷り越されよかし。」といふ文おこしたり。かねて同僚小杉玄適といふ者、その以前京

杉田玄白
蘭學者。若狹小濱藩の醫。外科解剖に通じた。文化十四年（一八一七）歿、年八十五。

三月三日
明和八年。

骨ヶ原
小塚原。今、東京市荒川區南千住町にある。當時の刑場の一。

小杉玄適
玄白と同藩の醫員。

師の山脇東洋先生の門に遊び、かの地にありし時、先生の企にて觀臟の事ありしに、此の男に從ひ行きて親しく視たるに、古人の諸說皆空言にて、信じ難きことのみなり。上古には九臟と稱せり。今五臟六腑の目を分ちたるは、後人の杜撰なりなんどいへることの話もありき。その時、東洋先生「臟志」といふ著書をも出し給ひたり。翁その書をも見し上のことなれば、よき折あらば、翁もみづから觀臟してよと思ひゐたりき。此の時、オランダ解剖の書も初めて手に入りしことなれば、照し視て何れかその實否を試むべし、一方ならぬ幸の時至れりと喜びぬ。

杉田玄白

山脇東洋
名は尙德。丹波國龜山の醫師。

翁
筆者みづからいふ。

さて、かゝる幸を得しことを獨り私すべきことにあらず。朋友のうちにも、家業に厚き同志の人々へ知らせ遣はし、同じく見て、相互に業事の益になしたきものと思ひ量りて、先づ同僚中川淳庵を始め、某誰と知らせ遣はせし中に、良澤へも知らせ越したり。

良澤は翁よりも齡十ばかりも長じ、我よりも老輩のことにてありし故、相識にこそあれ、常々は往來も稀に、交際疎かりしかど、醫事に志篤きは互に知りあひたる中なれば、この一擧に洩らすべき人にはあらず。先づ早く申し通じたく思ひたれども、さし掛りしこと、且この夜も蘭人滯留の折なれば、かの客屋にありける故、夜分にはなりぬ、俄かに知らすべき便もなし、如何せんと存ぜしが、臨時の思付にて、先づ手紙調へ、知れる人の許に立寄り、相謀りて本石町の木戸際に居たりし辻駕の者を雇ひ、「明朝しか〳〵のことあり。望あらば、早天に淺草三谷町出口の茶屋まで御越しあるべし。翁も此處まで罷り越し、待ち合はすべし。」と認めしを、置捨にて歸れと、持たせ遣しけり。

中川淳庵　蘭學者。小濱侯の藩醫。

良澤　前野氏。豐前中津藩の醫師で青木昆陽の門に學ぶ。享和三年(一八〇三)歿、年八十一。

齡十ばかり　當時良澤四十九、玄白三十九、淳庵三十三。

かの客屋　蘭人江戸滯在中の旅宿。

本石町　今の東京市日本橋區本石町。

前野良澤

その翌朝疾く支度整へ、彼處に至りしに、良澤參りあひ、その餘の朋友も皆々參會し、出迎へたり。時に良澤、一つの蘭書を懷中より出し、披き示して曰く、「これは「ターヘルアナトミア」といふオランダ解剖の書なり。先年長崎へ行きたりし時求め得て歸り、家藏せしものなり。」といふ。之を見れば、卽ちこの頃翁が手に入りし蘭書と同書同版なり。「これ誠に奇遇なり。」とて、互に手をうちて感ぜり。

ターヘルアナトミア　Tafel Anatomia. 和蘭解剖圖譜解體新書の原本。

これより、各、打連れだちて、骨ヶ原に設けおきし觀臟の場に至れり。さて刀を下すべき者參りて、刑屍の腹内を解き分け、かれのこれのと指し示し、心・肝・膽・胃の外に、その名なきものを指して、「名は知らねども、おのれ若きより數人を手にかけ解き分けしに、いづれの腹内を見ても、こゝにかやうのものあり、かしこにこのものあり。」と示し見せたり。圖によりて考ふれば、後に分明を得し動血脈の二幹、また小腎などにてありたり。

歸路は、良澤・淳庵と翁と三人同行なり。途中にて語りあひしは、「さて〳〵今日の實驗、一々驚き入る。且これまで心づかざるは恥づべきことなり。苟くも醫の業を以て互に主君々々に仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形體の眞形をも知らず、今迄一日々々と此の業を勤め來りしは、面目もなき次第なり。何とぞ

この實驗に本づき、大凡にも身體の眞理を辨へて醫をなさば、この業を以て天地間に身を立つるの申譯もあるべし。」と、共々に嘆息せり。良澤も、「げに尤も千萬、同情の事なり。」と感じぬ。その時、翁、「何とぞ此の「ターヘルアナトミア」の一部を新に飜譯せば、身體内外のこと分明を得、今日療治の上の大益あるべし。いかにもして通詞等の手を借らず、讀み分けたきものなり。」と語りしに、良澤、「予は年來蘭書を讀み出したき宿願あれど、これに志を同じうするの良友なし。常々これを慨き思ふのみにて、日を送れり。各、方愈、これを欲し給はば、われ前の年長崎へも行き、蘭語も少々は記憶し居れり。それを種として、共々讀みかゝるべしや。」といふ。翁曰く、「それはまづ喜ばしきことなり。同志に力を協せ給はらば、憤然として志を立て、一精出しみ申さん。」と。良澤これを聞き、喜悅斜ならず、「然らば、善は

良澤が宅　鐵砲洲奥平家の藩邸。今の京橋區新榮町。

いそげといへる俗説もあり。直ちに明日私宅へ會し給へかし。いかやうにも工夫あるべし。」と深く契約して、その日は各宿所々々へ別れ歸りたり。

翌日、良澤が宅に集り、前日の事を語りあひ、先づかの「ターヘルアナトミア」の書に打對ひしに、誠に艫舵なき船の大海に乘出せしが如く、茫洋として寄るべきなく、只あきれにあきれてゐたるまでなり。されども、良澤はかねてより此の事を心にかけ、長崎までも行き、蘭語竝に章句・語脈の間の事も、少しは聞き覺え、聞き習ひし人といひ、齡も翁などよりは老輩なれば、之を盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁、いまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちしことなれば、漸くに文字を覺え、かの諸言をも習ひしことなり。

扨、此の書をよみ、如何樣にして筆を立つべしと談じ合ひしに、迎

も始より内象の事は知れ難かるべし、此の書の最初に仰伏全象の圖あり。是は表部外象の事なり、其の名處は皆知れたる事なれば、其の圖と説の符號を合はせ考ふる事は、取付き易かるべし、圖の初とはいひ、かたゞ〳〵先づ之より筆を取始むべしと定めたり。即ち「解體新書」形體名目篇これなり。其の頃は前後一向に分らぬ事ばかりなり。譬へば眉といふものは目の上に生じたる毛なりと有るやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日には明らめられず。日暮るゝ迄考へ詰め、互に睨み合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得ざりしなり。

「ターヘルアナトミア」の表紙

フルヘッヘンド Verheffend.

又或日、鼻の所にて「フルヘッヘンド」せしものなりとあるに至りしに、此の語わからず。これは如何なる事にてあるべきと考へ合ひしに、如何にもせんやうなし。其の頃ウォールデンブック(釋辭書)といふものなし。やうやく長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小册ありしを見合はせたるに、フルヘッヘンドの釋註に、木の枝を斷ちたる迹、其の迹フルヘッヘンドをなし、又庭を掃除すれば、其の塵土聚りフルヘッヘンドすといふ樣によみ出せり。これは如何なる意味なるべしと、又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へかねたり。時に翁思ふに、木の枝を斷りたる跡癒ゆれば堆くなり、又掃除して塵土あつまればこれもうづたかくなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、フルヘッヘンドは堆しといふ事なるべし。然れば此の語は堆しと譯しては如何といひければ、各、之を聞

連城の玉　趙の惠文王が得た卞和の璧を秦の昭王が十五城を以てこれに易へんと請うた故事。

シンネン Sinnen.

きて、甚だ尤もなり、堆しと譯せば正當すべしと決定せり。其の時の嬉しさは、何にたとへん方もなく、連城の玉をも得し心地せり。此の如き事にて推して譯語を定めたり。

其の數も次第々々に增しゆく事となり、良澤の既に覺え居し譯語書留めをも增補しけり。其の中にもシンネン(精神)などいへる事出でしに至りては、一向に思慮の及びがたき事なりき。「是等は亦ゆく〳〵は解すべき時も出で來ぬべし。先づ符號を付け置くべし。」とて、丸の內に十文字を引きて記し置きたり。其の頃知らぬ事をば轡十文字と名づけたり。毎會色々に申し合はせ、考へ案じても、解すべからざる事あれば、其の苦しさの餘り、「それも亦轡十文字。」と申したりき。

然れども、「爲すべき事は固より人に在り、成るべきは天にあり。」の

不昧　朱子の大學章句に明德(心)を說明して「虛靈不昧」と言つてある。

喩の如くなるべしと、思を勞し、精を研り、辛苦せしこと一ケ月に六七會なり。其の定日は怠なく、わけもなくして各、相集り、會議して讀合ひしに、げに不昧なるものは心とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば、譯語も漸く增し、讀むに隨ひ自然と彼の國の事態も了解する樣にて、後々は其の章句の疎き所は、一日に十行も、其の餘も、格別の勞苦なく解し得る樣にもなりたり。尤も毎春參向の通詞どもへも聞き糺せし事もあり。又其の間に

解體新書

解體新書卷之一

日本　岩狹杉田玄白翼　譯
同藩中川淳庵鱗　校
東都石川玄常世通　參
官醫　東都桂川甫周世民　閱

○解體大意篇第一

○夫解體之書。所以解體之法也。蓋說形體之名狀。及諸臟之內外。一身之主用矣

○欲其審之者。無如直割見屍。其次無如割。

は解屍の事もあり。獸畜を解きて見合はせし事も度々なりき。

此の業怠らずして勤めたりし中、次第に同臭の人も相加はり、寄り集ふ事となりしが、各、志す所ありて一樣ならず。翁は一度彼の國解剖の書を得、直ちに實驗し、東西千古の差ひある事を知り明らめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業の發明の種にもなしたく、一日も早く此の一部を用立つ樣になしたしと志を起せし事ゆゑ、他に望む所もなく、一日會して解する處は其の夜飜譯して草稿を立て、其の譯述の仕方を種々樣々に考へ直せしこと四年、草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すやうになり、遂に「解體新書」飜譯の業を成就したり。抑、江戸にて此の學を創業して、腑分といひ古りしことを新に解體と譯名し、且社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し、我が東方闔國、自然に通稱ともなるに至れり。これ

今時の如く隆盛となるべき嚆矢なり。今を以て考ふれば、是迄二百年來、彼の外科法は傳はりしなれども、直ちに彼の醫書を譯すといふ事は絶えてなかりしが、此の時の創業、不可思議にも凡そ醫道の大經大本たる身體内景の書の新譯の起り始めとなりしは、不用意を以て得る所にして、實に天意とやいふべからん。（蘭學事始）

野上豐一郎
大分縣の人。英文學者。文學者。法政大學教授。

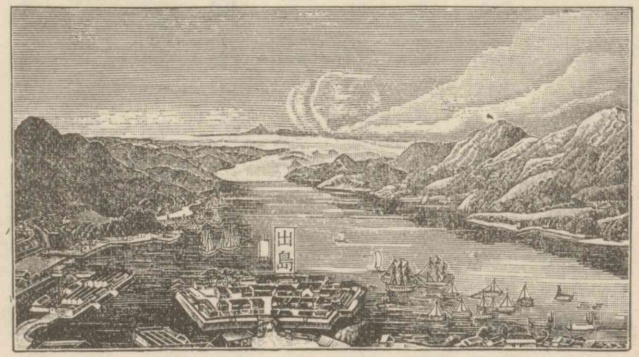
八　洋學の移入

野上豐一郎

日本の文化の成長を助けた二つの大きな外國の影響――千三百年前に始まつて數世紀間つゞいてゐた支那文化の影響と及び、三百年前から今日までまだつゞいてゐる西洋文化の影響と――此の二つの内で、今直接に我々に交渉するものは勿論後者である。併し西洋文化の移入は古代に於ける支那文化のそれの如く圓滑

大友宗麟
名は義鎭。天正十五年（一五八七）卒、年五十八。

には始まらなかつた。天文十年（西暦一五四一）に機會が一隻のポルトガル商船を大友宗麟の領地なる豐後の海岸に運び來つて以來、西洋と日本とのつながりは生じ、三年後には鐵砲が傳來し、九年後には天主教の宣教師が渡來し、交易と布教と相並んで榮え、豐後・肥前・筑前・薩摩等には洗禮を受けた者が非常に多く、國主中にも大友・大村・有馬の如き所謂切支丹大名が出來て、天主教の勢力は九州のみならず、更に山口・堺・京都にまで及び、政治上侮るべからざる狀態に立到つたと見たので、天正十七年（西暦一五九）豐臣秀吉は之を禁じ、ただ黑船の



長崎出島

慶長（一三五六―一三七四）
元和（一三七五―一三八三）
寛永（一三八四―一三〇三）

平戸
長崎縣（肥前）北松浦郡。長崎の西北五十三浬。

交易のみを許した。次に德川の天下となり、初めは外人に寛大であつたため、ポルトガル（長崎）、エスパニヤ（浦賀）、オランダ・イギリス（平戸）等、競つて互市を開き、同時に切支丹信仰もまた盛んになつて來たので、慶長から、元和・寛永へかけて禁教また禁教、或は追放、或は處刑、遂に鎖國令は完全に布かれ、僅かに平戸の蘭人と長崎の葡人のみが通商を許されることになり、續いて蘭葡競爭の結果、後者は敗れて長崎を見棄て、寛永十八年（西暦一六四一）其處へ蘭人の商館が平戸から移されて、それ以來長

出島の市街

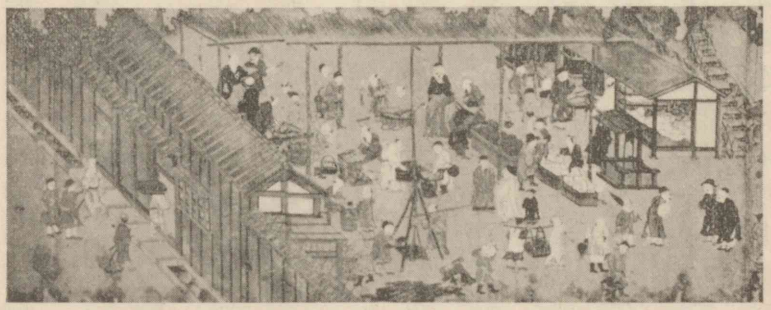
出島
いま出島町と稱する。寛永十一年長崎市民が私財を以て築いたもの。

新井白石
名は君美。博學にして幕政に參與した。享保十年（一七二五）歿、年六十九。

崎出島のみがわが國の西洋と交渉する唯一の關門とはなつたのである。

出島の阿蘭陀屋敷――それは珍奇と新鮮の有らゆる異邦的なるものゝ仲繼所であつた。其處には毎年本國から交替して來る甲必丹（一種の領事）が逗留してゐて、嚴重なる日本官憲の監視の下に交易が行はれた。彼の周圍には公認されたる數名の通詞がゐて、一般日本人と紅毛人との直接の對話を妨げた。いつしか通詞の家が唯一の西洋語の貯藏所となつた。甲必丹は毎年一回通詞を隨へて江戸なる將軍を訪問すべく旅行せねばならなかつた。江戸にも熱心なる西洋研究希望者はゐた。――新井白石はその最も著しい一人であつた。――けれども甲必丹の滯在は限られたる僅かの日數であつたので、その附添通詞について學習するこ

青木昆陽
儒者。蘭學者。名は敦書、通稱文藏。明和六年(一七六九)歿、年七十二。



阿蘭陀屋敷

とは困難であつた。それ故に阿蘭陀語を學習するためには是非とも長崎へ行かねばならなかつた。――青木昆陽がその最も著しい先驅者であつた。

斯くの如くして通詞等は唯一の最大の蘭語學者であるべき筈であつたにも拘らず、實は彼等は――今日から見ると甚だ奇異なることに思はれるが――外國の言葉を「話す」ことは許されてあつたけれども、外國の文字を「讀む」ことは許されてなかつた。延享元年(西暦一七四四)に青木昆陽が賜暇を得て長崎に遊學した時、通詞等の訴へる不平を

後藤梨春
本草家。名は光正、梧桐庵と號した。明和八年(一七七一)歿、年七十五。

聞いて幕府に取りなし、その翌年、西・吉雄・本木の三通詞だけが初めて阿蘭陀文書讀譯の特許を得た。併し、その他の者は依然として一切の外國文字から遮蔽されてゐた。此の不便は幕府が切支丹邪宗を極度に恐れた結果に外ならなかつた。更に、幕府の神經過敏は、一例を擧げれば、單に僅少の横文字を挿入したといふだけの理由を以て、無害の隨筆「紅毛談」(後藤梨春)にさへ絶版を命じたりした程であつた。

それほどやかましい禁制の中から蘭學が湧起つたのはなぜかといふと、つまりは時勢がそれを要求したからであつた。幕府が初めそれを禁止したのは、それが幕府の施政に都合がわるいと思はれたからであつて、勿論要求がそれきり中絶したのではなかつた。要求は禁制の間にも次第に成長し、元祿を過ぎて享保の頃に

は既に十分の機運を造つてゐた。將軍吉宗は或る意味に於いてその機運の助成者であつた。その機運の核心を成すものは未知のものを既知のものにしようとする熱情に外ならなかつた。その熱情は主として應用科學の方面に向けられた。殊に醫學と藥學の研究が需用の代表者であつた。當時、時代に先行して此の方面の開拓をこゝろざした具眼の士のことを俗に「豪傑」と呼んだ。元龜・天正の昔には槍を持つた豪傑が天下を横行したが、享保以後の豪傑は長崎通詞の家から祕密に「ウォルデンブック」を手に入れて、それに依つて不思議なる未知の世界の征服を企てた。

我々は先づ前野蘭化の名を記憶せねばならぬ。彼は青木昆陽に二十五歲の弟で、杉田玄白に十歲の兄であつた。初めに甘藷先生に就いて蘭語の入門的知識を得、再度長崎に遊び、數卷の原書と

吉宗　德川八代の將軍。寶曆元年(一七五一)薨、年六十八。

元龜(一五七〇—一五七三)　天正(一五七三—一五九一)

ウォルデンブック　釋辭書。

前野蘭化　前野良澤。後に蘭化と號した。前出。

甘藷先生　青木昆陽。

蘭學階梯　二卷。大槻茂質(文化十年歿、年七十一)著。

桂川甫周　蘭醫。幕府の侍醫。

杉木龍橋　名は昌綱。丹波福知山城主。

嶺春泰　高崎藩醫。

石川玄常　江戸の醫。名は正通。

桐山正哲　弘前藩醫。

鳥山松圓　庄内藩醫。

大槻磐水　玄澤と稱す。蘭學者。仙臺侯の侍醫。

宇田川槐園　蘭學者。津山侯の侍醫兼侍讀。

司馬江漢　洋畫家。初め鈴木春信・谷文晁に學び、後、長崎で洋畫を修めた。

首つ引で獨學して蘭文の基礎的構成を理解するに至つた。誠に千載の鴻業不朽の大功と云ふべしと「蘭學階梯」の著者は稱揚した。彼の蘭語が當時いかに貴重なものであつたか、また「解體新書」の譯出に取つていかに必要なものであつたかは、「蘭學事始」の記述に依つて容易に推知されるであらう。彼の周圍に集まつた所謂豪傑の士としては、杉田玄白・中川淳庵・桂川甫周・杉木龍橋・嶺春泰・石川玄常・桐山正哲・鳥山松圓・大槻磐水・宇田川槐園・司馬江漢等があつた。いづれも皆好學の士で、その研究は主として醫學・藥學ではあつたが、窮理・天文、その他の部門にもその歩を進め、或は輪講し、或は翻譯し、それより蘭學は天下に廣まり、欽嚮の諸才子、千里に笈を負ひて東都に集まるといふ狀況を呈した。日本最初の蘭學塾なる大槻磐水の芝蘭堂の設立されたのは寛政元年(西暦一七八九)で、その後同種の

ものが諸所に設けられ、蘭語に次いでは、英・魯・佛・獨等の諸國語も次第に學習され、延いては遂に今日の洋學研究の隆盛の端を開くに至つたのである。（「蘭學事始」解說）

養和元年　紀元一八四一年。
一萬　曾我十郎祐成の幼名。
箱王　曾我五郎時致の幼名。
父　河津祐泰。祐親の子。安元二年（一八五）工藤祐經の部下に殺された。
曾我殿　祐信。

九　空行く雁

頃は人皇第八十一代安德天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。其の佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせたまへ。」といひければ、遙かに忘れたる空も今更思ひ出されて、消えいるばかりなり。母泣く〳〵のたまひけるは、「あの曾我殿こそ己等が父にてあれ。」と心强く語られけれども、涙に咽びて、陳じ

工藤一萬　祐經。
鎌倉殿　源頼朝。

やる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前は、まことやらん、『狩場より歸りたまふ道にて、工藤一萬とやらんに射られて死にたまひぬ。』と兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿の切りものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等が此の里にあるを知らでや過ぐらん。」など大人しく語れば、母より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

安藤廣重筆

かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、「あれ見たまへ、箱王殿。空に飛ぶ翼も、別の翼ぞ交へぬ。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓・矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者も馬・鞍・弓・矢を以て物を射ありく事の羨ましさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前の戀しく思ひ參らせらるるぞや。」とて、袖に顔を差入れてさめ〴〵と泣きければ、弟も小賢し

翼（鳥）人倫（人々）の人々としての道

ら せ 敬語

うる、自発

く顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房之を聞きて、「あなうにはおはするぞ。あさまし、人もこそきけ。いかに和上達たち、夜も更けぬるに、さや入らせ給へ。」と恐しげにいひければ、二人の者は門外に逃げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにけり。

其の後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ、語りあはするまではなけれども、唯、目ばかりを見合せて、互に袖をぞ濡しける。未だ十歳にも滿たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。或時兄弟は竹の小弓、薄矧の小矢を取添へて遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬、箱王に申しけるは、「我等もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵

あゝ、あんまりだ。人が聞きますよ。何んとあなたが左夜も更けるまでいでになるのか。

矧（矢を作る竹の皮は薄で作った矢をそりそへて。）

遠侍（中間、横にあって、主人の武士の居る処。武家ゾウ。）

祐經をかくの如く刺合ひ、射取りて後には、どもかくもなりなん。和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。」といひければ、弟も打頷きけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひけり。（曾我物語）

どうなってもよい。

曾我物語　曾我兄弟仇討の始末を記す。十卷。鎌倉室町時代に出來たもの。作者不詳。

森鷗外　島根縣津和野の人。名は林太郎。醫學博士。文學博士。大正十一年歿、年六十一。

一〇　曾我五郎

森鷗外

將軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。中央前景に狩野介宗茂・新開荒二郎忠氏ゐる。

第一の大名　最早辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の小平太はどう致いたやら。（第二の大名に）固より曾我の殿原は奸盜山賊の類でもござらぬに、笑止にも縄附になり申した。

第二の大名　情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つた

——曾我五郎（右）五所五郎丸（左）（廣重筆）——

工藤は父の仇ゆゑ、申し宥める道もこざらう。御屋形の御座所近く推參致いたと申すからは、罪科は所詮逃れますまい。

（雜色登場。）

雜色　只今これへ曾我の五郎を召連れてまゐりまする。

（雜色退場。五郎登場。大見小平太實政縄を取る。狩野座を進む。）

狩野　曾我の五郎、承れ。只今これへ召されたは、某と新開とが承つて、敵討の宿意を尋ねるためぢや。さあ逐一に申し立てい。

五郎（怒る。）だまれ、狩野介。祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和のため自滅に及んでから以來、久しく落魄いたいてをるが、某とても遠祖左大臣藤原の武智麿が流を汲む、由緒ある身分ぢや。申す程の事はぢきに申さう。若しそれがかなはぬなら、何事も申すまい。

武智麿　不比等の子。藤原南家の祖。

狩野　怪しからぬ事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開　それを彼此申すのは、犯人の身となつてもまだ君に楯つく所存か。

頼朝の聲（簾の内より）いや、待て狩野・新開。曾我の五郎が申す條尤もなれば、頼朝みづから聽いて遣はす。

（簾を半ば捲く。頼朝登場。舍人二人、近臣二人隨ふ。狩野退く。新開中央に殘る。）

五郎（新開に）そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそれにゐては、和殿に物言ふに似て、快うない。

將軍　新開退いて遣はせ。

新開　はあ。（新開退く。）

將軍　見れば昨夜の雨に、そこの土は濕つてをる。誰かある。曾我の五郎に敷皮を取らせい。

卒　はあ。（卒、右手より敷皮を持出で、敷く。）

五郎（感激す。）

此の敷皮を見るにつけ、

十年の昔ぞしのばるゝ。

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めでたく、名利のために訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行うた、小賢しき敵工藤が、時勢の移り變るに乘じて、宇佐美殿によつて御目見えを賜はり、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽足らいで、我々兄弟を殺さうと、讒舌を揮うた爲、

兄一萬は十二歳、

此の箱王は十の時、

平相國親子　平清盛とその子宗盛。

工藤　工藤左衞門尉祐經。曾我兄弟の父を殺害させた人。當時頼朝の寵臣。

伊東　今の靜岡縣田方郡伊東町。

由比
神奈川縣鎌倉郡。

由比が濱邊に伴なはれ、
引据ゑられし敷皮は、
夢見ごこちに春を待つ
莟を摧きし悲涙の座。
今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨をはらし、此の世に思ひ
置くことなければ、
最期を急ぐわが爲に、
此の一枚の敷皮は、
父に見えん彼岸に
渡す弘誓の舟筏。

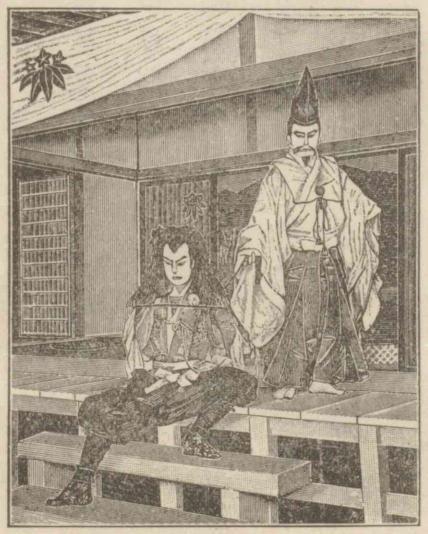
将軍　有難く拜領いたす。（敷く。）
殊勝な覺悟ぢや。然らばみづから尋ねるが、此の度工藤を討

足柄・箱根・大磯・小磯・由比・小坪
何れも伊東から鎌倉までにある道中の地。

五郎　取つたのは、年頃の企か、但しは俄かの思立か。
それは申すまでもない事。我等が父を討たれたは、十七年の
昔。兄は五歳、某は三歳、しかと意趣をも存ぜなんだが、兄が九
つ、某が七つになつて、物心
を辨へてから以來は、片時
忘れぬ復讐でござる。

将軍　然らば伊豆にある工藤が、
十年の久しい間、月に四五
たび、乃至十度も鎌倉へ通
うたに、なぜ途中では討た
なんだ。

五郎　いかにも其の往返には心を附け、足柄・箱根・大磯・小磯・由比・小坪



頼朝と曾我五郎

のあたりにたゝずみ、兄弟附け狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少なき時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

將軍　ふん。さもあらう。扨工藤は父の仇ゆゑ子細ないが、多くの麾下の侍をば何故妄に傷つけた。

五郎　固より我等兄弟は、かゝる狼藉を企てたからは、及向ふものの、あらん限り、千萬騎をも切りなびけうと存じたが、我等の名告る聲を聞いて、足の立所も知らず逃げ行くゆゑ、後日のため一太刀づつ印を附けたまでござる。

將軍　して、大藤内はなぜ討つた。

五郎　あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切りすてはいたいたが、所領安堵を喜んで

伊東の次郎　名は祐親。祐家の子。治承四年（一八四〇）自殺した。

三浦殿　名は義澄。義明の第二子。正治四年（一八六〇）歿、年七十四。

下國する途中、報謝のために引返したは、せめてもの心掛、今はなか〳〵不便に存ずる。

將軍　神妙な詞ぢや。ぢやが、それ程義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座所に踏込んだ。

五郎　これは憚ある申し條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道主人ではござらぬか。それが、成行とは申しながら、三浦殿に預けられて自滅致いた。又敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これらの遺恨なきにあらねば、一太刀お恨み申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

將軍　おう。好う藏さずに申したぞ。此の度の企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引のものがあらう。事の序にそれも申せ。

五郎　さやうなものは一人でもござらぬ。

將軍　さはいへ、母には打明けたであらうな。

五郎　こは仰とも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死に
に往けと申す親のござらうや

將軍　おう。一族否運に陷つたそちが申し條としては、一々尤も至
極に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲（上手背後にて）　はあ、四郎忠常只今それへ。

（仁田首桶を持ち、登場。）

仁田　仰によつて曾我の十郎が首級、これに持參いたいてござる。

將軍　五郎。兄に逢はせて遣はすぞ。それ、いましめ解け。

（大見、五郎の繩を解く。）

仁田　實檢の上申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ對面

いたされい。（首桶を開く。）

五郎　懷かしや、兄上。
　　點し列ねし松の火の
　　消えなば共にと思ひしに、
　　不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにて
　　も、兄上、どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くと
　　も、時致だに居合はせたら。

仁田　いや。和殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は
　　切りまくられ、右の肘と小鬢とに薄手をさへ負うたれど、十郎
　　が運拙く、我が薙刀に拂はれて、及はほつきと鍔元から。

五郎　なに。兄上の太刀が折れたとか。なぜ我が太刀を兄上に佩
　　かせなんだか。

仁田　おう。その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼止めて、首を我が手に授けたのぢや。

五郎　さてはよしみある御身が手に、兄上好んで掛られたか。

（五郎歎く。犬房丸鞭を持ち走り出づ。）

犬房　父上の敵、思ひ知れ。（五郎を鞭うつ。）

五郎　や、この小童は何者ぢや。（五郎睨む。犬房たじろく。）

仁田　犬房丸、御前ぢやぞ。

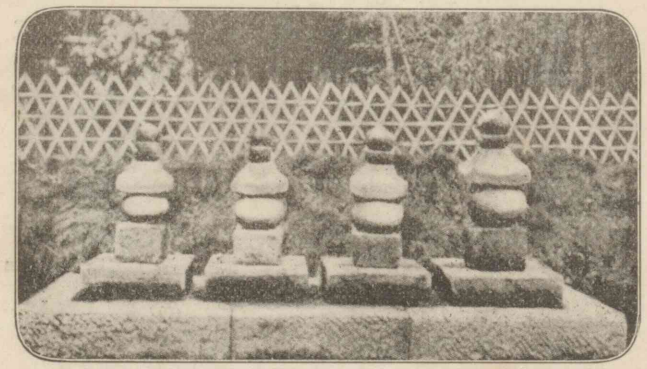
五郎　なに、犬房丸が御身か。

彼も人の子、穉くて親を討たれし悲みはいかでか我に異ならん。

果報の縄に引かれずば、及を取りて立向ひ、御身に討たれん我が身なり。刑場の土になるわしぢや。せめてもの心遣りに、さあ、其の笞で打つてくれい。

犬房　父上を討つたお前は強い人ぢやと思うたに、優しい事を言うて下さる。それではどうも打たれませぬ。

五郎　おう。さうか。さあ、につくい小わつぱ、打たれるなら、打つて見い。



曾我兄弟の墓（向つて左二基）
（神奈川縣足柄下郡下曾我村城前寺）

犬房　なんの打たいで。おのれが、おのれが。（連打す。）

將軍　もう好い、好い。犬房、それで堪忍いたせ。

犬房　はつ。（鞭を棄てて平伏す。）

將軍　五郎。此の上問ふべき事もないが、賴朝閫外の職を辱うして、勇士猛卒を惜むこと何物にも譬へられぬ。どうぢや。志を飜して奉公致してくれまいか。

五郎　それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら、某は犬房に此の素首を取らせ申さう。犬房が討たいでも、

近き惠に代へられぬ
遠き恨のまつはれば、

いつ謀反人にならうも知れぬ。一しよに死なうと誓うた兄

閫外の職　上古王者之遣レ將也、跪而推レ轂曰、閫以內者寡人制之、閫以外者將軍制レ之。（史記、馮唐傳）

を、久しう待たせるも心苦しい。首刎ねられるを待つ外ござらぬ。（大見に）さあ繩を打たれい。

大見　いや、某は五郎丸が掛けた儘の御身の繩を、君命によつて預り、又君命によつてほどいたばかりぢや。御身に繩打つすべを知らぬ。

將軍　待て、勇士を失ふは遺恨ながら、其の志は奪ふべからず。五郎が繩は賴朝が手づから打つて遣はさう。

五郎（居直る。）こは思ひも掛けぬ仰ぢや。今生の思出に、さあ御繩を拜領致さう。

將軍（起つ。）わが打つ繩は不動の羂索、難伏のそちには相應はしからう。いで〳〵。

（階を降らんとす。幕）

（鷗外全集）

上田秋成　大阪の人。和學者。文化七年(一八一〇)歿、年七十八。
相阪關　滋賀縣滋賀郡にあつた。
鳴海潟　愛知縣愛知郡。今は全く陸地となる。
浮島ヶ原　靜岡縣駿東郡愛鷹山の裾の須戸沼附近の原野。
鹽竈　宮城縣宮城郡にある。
象潟　秋田縣由利郡象潟町附近の海岸。
佐野の舟橋　群馬縣邑馬郡佐野村烏川の渡。
仁安三年　六條天皇の御代(一一六八)。
白峰　香川縣綾歌郡松山村。

一一　白峰の陵

上田秋成

相阪の關守に許されてより、秋來し山のもみぢ葉見すごし難く、濱千鳥のあと蹈みつくる鳴海潟、富士の高根の煙、浮島ヶ原清見が關、大磯・小磯の浦々、むらさき匂ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蜑が苫屋、佐野の舟橋、木曾のかけ橋、心のとゞまらぬ方ぞなきに、なほ西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、葭がちる難波を經て、須磨・明石の浦吹く風を身にしめつゝも、行く〳〵讃岐の眞尾坂の林といふに暫く筇をとゞむ。草枕遙けき旅路のいたはりにもあらで、觀念修行の便りせし庵なりけり。この里近き白峰といふ所にこそ新院の陵はあれと聞きて、拜み奉らばやと、十月はじめつ方かの山に登る。松・柏は奥深く茂り合ひて、青雲のたなびく日すら小雨そぼ降るが如し。兒が嶽といふ險しき嶺、後に峙ちて、千仞の谷底より雲霧おひ上れば、まのあたりをも覺束なき心ちせらる。

新院　崇德上皇。

白峰御陵

木立わづかにすきたる所に、土高く積みたるが上に、石を三かさねに疊みなしたるが、うばらかづらに埋もれてうら悲しきを、これならん御墓にやと、心もかきくらまされて、更に夢現とも分きがたし。

げにまのあたりに見奉りしは、紫宸清涼の御座に大政きこしめさせ給ふを、百のつかさ人は、かく賢き君ぞとて、御言かしこみて仕

へまつりし。　近衞院に讓りましても、藐姑射の山の玉の林にしめさせ給ふを、思ひきや麋鹿の通ふ路のみ見えて、まうで仕ふる人もなき深山のおごろの下に、神がくれ給はんとは。　萬乘の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふもののおそろしくも添ひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき出づるが如し。　夜もすがら供養し奉らばやと、陵の前の平なる石の上に座を占めて、經文靜かに誦しつゝも、かつ歌詠みてたてまつる。

松山の涙のけしきはかはらじを
かたなく君はなりまさりけり

尙こゝろ怠らず供養す。　露いかばかり袂に深かりけん。　日は入りしほどに、山深き夜のさま常ならぬ、石の床、木の葉の衾いとさ

雨月物語　上田秋成著。九篇の傳奇小說を收めたもの。
爲朝　鎭西八郎爲朝。
圓位　西行の法名。

むく、神清み、骨冷えて、物とはなしにすさまじき心ちせらる。

（雨月物語）

○

折しもさし入る月光に、爲朝、御廟の柱を見上ぐれば、二首の歌を書き、仁安三年十月日圓位とあり。　さては西行法師も、去年の冬こゝへは參りけんと頷きつゝ、石の玉垣の斜なる扉を押開きて蹲踞し、さて申すやう、「君、十善萬乘の聖主として、錦帳を北闕の月に輝かし給ひしも、今は懷土望鄕の魂、玉體を南海の俗に混ず。　露を拂つて御跡を尋ね奉れば、秋草泣いて涙を灑ぎ、嵐に向つて君が墓を問へば、老檜悲しんで心を傷ましむ。　佛儀は見えずして、たゞ朝雲夕月を見る。　法音は聞えずして、たゞ松響鳥語を聞く。　軒傾きては曉風寒く、夢破れては夜雨防ぎ難し。　昔今の御有樣、いと痛はしくも淺ましく思ひ

大島　伊豆。爲朝の流された島。

椿說弓張月　鎭西八郎爲朝の一生を描いた小說。三十卷。馬琴の著。

村上鬼城　高崎の人。名は莊太郎。俳人。

奉れど、微臣が孤忠を述ぶるに由なく、既に力竭き勢窮まりて、今生の誠忠を訴へ後世の苦樂を共にし奉り、君につれなかりける者どもを、悉く取り殺さばやと思ふのみ。圖らずも大島を逃れ來て、尊靈を驚かし奉るものなり。」と申し果てゝ、涙を潸然と落しつゝ、やがて氷なす短刀を拔いて、腹に突き立てんとするに、怪しきかな、手足忽ちにしびれて如何ともすべなし。

（椿說弓張月――瀧澤馬琴）

一二　夜長

鐘つきのあそびに來たる夜長かな　村上鬼城

少しづつゐざるけしきや秋の雲

西山泊雲　名は亮三。丹波の人。俳人。

相島虛吼　名は勘次郎。大阪の人。俳人。

原石鼎　名は鼎。島根縣の人。俳人。

島田青峰　名は賢平。三重縣の人。俳人。

雞搔いて痛めし土や鳳仙花　西山泊雲

明月や葎のなかの水たまり　相島虛吼

朝顏や井水つめたき我が庵

日覆とるや秋日疊にすがくし　原石鼎

山をさの年木ゆゝしく積まれけり

谷ぞこを一つあるけり石たゝき　島田青峰

庇かげふかくと落ち冬障子

あすの葱ぬいて仕事をしまひけり

藤田東湖
名は彪。勤王家、水戸藩士、安政二年(一八五五)卒、年五十。

慎み中
弘化四年(一八四七)から嘉永五年(一八五二)まで水戸に謹慎を命ぜられた。

當二月
嘉永五年二月。

弘道館
水戸藩の學校。天保十三年(一八四二)德川齊昭が開いた。

一三　人の問に答ふ

藤田東湖

一、兩年以來十數度の貴翰、尙又時々御惠投ものに預り、殊に當春梅花の御贈もの等、實以て御厚意淺からず。僕が頑鈍狂愚、何故、右樣御眷顧下され候や、謝する所を知らず、汗顏の至に御座候。

さて慎み中は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を脫し候上は、早速一書を裁し、右數度の御厚意を謝し候筈の處、爾來僕が境界、實以て寸暇もこれなく、尤も日々夕刻大白を傾け候暇はこれあり候へども、其の外はとかく閑隙を得ず、今日始めて貴答に及び候。

一、先年弘道館にて貴兄御面貌はたしかに相覺え候。謂はゆる嶄然頭角、今以て心目に宛然に御座候處、追々御詩文等拜見、尙又御噂承知致候へば、近年益、御研精の由、憚ながら感心仕候。老人くさき申分には候へども、御國も學校御開き以來、讀書家は澤山に相成候へども、眞實の學者は寥々に御座候間、國家のため御勵精尤もに存候。僕などは罪名載せて幕府の籍にある身分にて、天地の一棄人に候間、理窟がましきことは一切申すまじと心がけ候へども、「大義未だ曾て君臣を忘れざる」の至情もだし難く、且は度々の御細書、御深意をも推察致し、旁、心事ほゞ吐露仕候。

一、申す迄もこれなく候へども、學問は實學にこれなくては、却

御國
水戸藩。

大義云々
宋の陸放翁の語に「大義未ニ曾テ忘ニ君臣一」とある。

て無學にも劣り申候。弘道館記中に「忠孝無二、文武不レ岐、學問事業、不レ殊二其效一」と遊ばされ候儀、實に學者立志の模範、志士報國の根本に御座候はんか。今世、親孝行の樣なれども、御奉公は出來ぬ風の人も相見え、又御奉公出來候樣にても、父子の中とくと致さざる向も相見え候。これら決して聖人の道にあらずと存候。又少々書を讀み候へば何か子細らしき顏色を致し、言語等漢文交りにてしやらくさく候へども、劍槍等の藝一切出來申さず、文弱白面の書生と相成候儀、毛唐人ならばそれにて宜しきかも相知らず候へども、かりそめにも神州尙武の域に生れ、且は武家の飯を食ひ候者は、右樣白面の書生は風上へも置きかね候事勿論に御座候。武人の愚にも困り候へども、どちらと申候へば、寧ろ文弱の書生にはまさり申すべきか。

弘道館記
水戸侯德川齊昭が藩學弘道館を設けた由來を述べて水戸學の精神を明かにしたもの。

しかし、成るべきだけは、文武岐れず兼備これありたき事、是亦勿論に御座候。

學問・事業その效を殊にせざるに至り候うては、なか〳〵難物なり。僕が輩頑白に相成候へども、今以て學問・事業一致の場合に相成申さず及ばずながら心を用ひ居る事に候。修己治人の工夫、明倫正名の講究、時々刻々離れ申さず候はゞ、貴兄などは妙齡の御事ゆゑ、必ず學問・事業の一致も御出來なされ候はん。隨分御研精御尤もに御座候。

一、讀書は博きを貴び候へども、うはすべり致し候うては、萬卷の書を讀み候とても、用をなしかね候はんか。古人の謂はゆる「眼光紙背に透る。」と申すごとく讀みたき事に御座候。次第次第に後の世に生まれ候ほど、讀書多く相成申候。古人は六

十七史　史記・前漢書・後漢書・三國志・晉書・宋書・南齊書・梁書・陳書・魏書・北齊書・周書・隋書・南史・北史・唐書・五代史。

二十一史　十七史及び宋史・遼史・金史・元史。

東坡　宋の文豪蘇軾の號

漢書を讀み　某讀ニ漢書ヲ一至レ是ニ凡三經手鈔ヲ一矣。初則一段事鈔ニ三ヲ一爲ス題ト、次則兩字ニ爲ス題ト、今則一字。（東坡外傳）

史か七史讀み候へば相濟み候が、十七史又は二十一史と申す様に相成、末が末に相成候はゞ、三十史も五十史も讀み申さず候うては相成らざる譯合故、博きを貴び候中にも、その要を得候儀肝要と存候。人の持前種々これあり候故、一概には申兼候へども、歷史等も唯、ばつと讀み候よりは、何か一つ講究著述致す心得にて讀み候方、格別に益を得候様相覺え申候。制度の事も、文辭の事も、名君賢相の行狀、其の外一々記憶致すべしと存候うては、大抵の人にては中々覺え兼申候。東坡が漢書を讀み候法など面白く御座候。尙又御勘考御尤もに存候。

一、文章は末藝に候へども、自分にて文を書き候位にこれなく候うては、經書も歷史も本當に解し申されず候間、隨分御餘力には御修行御尤もに存候。

慶元　慶長元和の略。德川幕府創始の時代

仁齋　伊藤仁齋。

徂徠　荻生徂徠。又物徂徠といふ。

熊澤　熊澤蕃山。

新井　新井白石。

東夷の人　日本國夷人物茂卿拜手稽首敬ニ題ス贊孔子眞ニ。（徂徠集）

司馬溫公　北宋の司馬光。字は君實。諡して溫公といふ。

朱文公　南宋の朱熹。字は元晦。文公と諡す。

韓魏公　北宋の韓琦。字は稚圭。魏國公に封ぜられた。

一、慶元以來、人物林の如く、豪傑も追々に出で候處、其の中にて、仁齋の學問、徂徠の文章、熊澤の經濟、新井の敏捷など、皆畏るべく存候。併し右の內、徂徠は更に名分を存ぜず、自ら東夷の人と稱し候儀不屆至極に御座候。新井も才氣絕倫に候へども、東都を張り立て候志は惡むべく候。さ候へば、今に在つては右數子の長を取り、短を捨て、實學講究致し、孔子の遺意に適ひ候樣、御同意企望致したき事に御座候。今世の儒者動もすれば唐人の事は丁寧に申し、司馬溫公・朱文公・韓魏公などと稱へ、さて新田義貞が云々、楠木正成が云々など申候類甚だ相濟まず。右樣の人をば僕は、每々和唐人と唱へ申候、御一笑下さるべく候。その外當世の學風其の弊少からず候へども、迚も、書中に盡しかね候故、まづその一端を擧げ候のみに御座候。

僕は最早貴地などへ出で候事は終身これなく候間、拜面もむづかしく候處、貴兄は御墓參御對面等にて御歸郷も御自由ゆゑ、もし來春など一寸も御歸郷に相成候はゞ、種々存候だけの事は御切磋申すべく候。

先は今日は前文御申譯かたぐ一書を裁し候事に御座候。併しながら御覽の通り亂筆、さぞ御讀みかねなされ候はんと閣筆致候。以上。（寺門誠所藏文書）

ひろなりの皇子　後村上天皇の皇子、熙成親王。後に御即位ありて後龜山天皇と申す。應永三十一年（一四〇四）崩、壽七十五。

菜摘河　奈良縣吉野郡吉野川の上流。

一四　いのりなほし

ひろなりの皇子の、未だ幼うおはしましける時に、若き殿上人數多伴はせ給ひて、菜摘河の河澱の邊にて、鷹つかはせて、御覽ありけるに、傍に、いと大きなる巖の、えもいはず面白きに、松の生ひいでたるありけり。皇子御覽ぜられて、「この岩を、歸りなん時、皇居の御庭にもてまゐれ。上に奉らん。」と實爲中將に宣はせければ、幼き御心を推し量りて、みことうけせさせ給ふ。

鳥など、數多とらせ給ひて歸らせ給へる時に、忠行侍從に「岩を忘れた（まひし）」と宣はせければ、「民部大輔が、力も強く侍れば、御後よりもて參り候ふなり。」と啓して、皇居に還りいらせ給ふ。

御鷹の鳥など奉らせ給うて、實爲中將に「ありつる岩を。」と召させ給ふに、「忠行の侍從の、仰言を承りぬ。」と啓し給へば、侍從を召して、「いかに」と尋ねさせけるに、「民部大輔の、御後よりもて參らんといひ侍りつる。民部を召させ給ひなん。」とのたまへば、むつがらせたまうて、「中將にこそよくいひつれ、などさはいふにか。」とし、らせ給ひければ、中將の、ありつることを奏し給へば、上にもをかしがらせ給ひ

實爲中將　藤原氏。阿野實村の子。内大臣に至る。

忠行侍從　源忠行。

民部大輔　姓名不詳。

て、「誠に面白からん、岩こそ見まくほしけれ、民部が力こそゆゝしければ、もて來なんに、召させ給へ。」と宣はするに、中將立ち給うて、民部大輔に「かゝることなんある、いかがしてん。」と宣へば、「すべきことこそあなれ。」とて、御庭にありける小さき岩に松の枝を取りつけて、中將と、いと重げに持ちて、宮の御前に据ゑ奉れば、「これは、いと小さくこそあれ、それにはあらじ。」となほむづからせ給ひければ、民部大輔、「さればこそ、その岩を持ちて上の山を通り候ひしに、右左、山のさし出でて、道のいと狹き處にて、かなひ難く、いかにせましとたゞよひ侍りしに、向ひの方より山伏の來りけるが、『岩にせかれて通られぬにこそ、除け給へ。』と罵りける程に、『我もせん方なきに、かくて侍る、いかにせまし。』とわびあへるに、『さらば、すべき事こそあれ。』とて、數珠おし揉み、何やらん呟きて祈るに隨ひて、この岩小さくなりて、やすやす通りてさふらひし程に、山伏も行き過ぎしを、呼び返して、『もとの如く祈り直してん。』といひければ、『また、ゆく先に細き道のあらんに、如何し給はん。』といひし程に、げにもと思ひ侍りて、そのまゝもて參りぬ。」といひ給へば、上より始めて、ありつる人々をかしがらせ給ふに、宮の御氣色もいとよくならせ給ひて、「げにさもあらんことなり。その山伏を召返せかし。」と宣はするに、「はや、遙かに行き過ぎて、いづち行くらんも知られず。」と啓し給へば、「本意なきことにこそ。あれ、とゞめて、民部大輔の大きなるそら言を、すこしきやうに祈らせんものを。」と宣はせける。まことに行末頼もしき御ことにこそ、いとせめて覺え侍りしか。（吉野拾遺）

吉野拾遺　吉野朝の事蹟を假名で記した書。奥書に松翁とある。

憂あれば聞くこと厭ふわが身とも知らでやこゝに鶯の鳴く　（藤原師賢）

君がためわが執りきつる梓弓もとの都にかへさゞらめや　（藤原隆俊）

—新葉和歌集—

大峯・葛城　ともに奈良縣（大和）にある高山。山伏の修行場であつた處。

一五　蟹山伏

〔次第〕貝をも持たぬ山伏が、貝をも持たぬ山伏が、道々うそをふかうよ。

山伏　これは出羽の羽黑山の山伏でござる。このたび大峯・葛城の役を勤め、只今がかけ出でござる。やいやい、强力、あるか。

强力　はあ、おん前に居ります。

山伏　早かつた。汝も知る如く、今度大峯・葛城の役目を首尾よう勤め、本國へ下る。何とめでたい事ではないか。

强力　御意なさる通り、おめでたい事でござる。

山伏　如何にも其の通りぢや。いざ追つつけ行かう。汝も供せい

山伏　さあ、來い來い。

强力　參ります。

山伏　やいやい。身ども、ひさびさ難行・苦行をいたしたによつて、恐らくは、空飛ぶ鳥も祈り落すことぢや。何と尊いことではないか。

强力　仰の通り、貴いことでござる。

山伏　此の如く行く道にて、何なりとも、汝が眼前にて奇特を見せたいなあ。

强力　されば、こなたの行力の達した奇特を見たうござります。

山伏　やあ、何とやら山が鳴る音のやうな。暗うなつたぞ。

强力　されば、いかう山が鳴つて參りました。只事ではござるまい。こはい事でござる。

山伏　これは、これは、頻に鳴つて來たは。　油斷すな。

かに　どどどどどど。

強力　そりや、何やら出ました。　こはいものでもござる。　なう悲しや、なう悲しや。

山伏　さてもさても、おそろしいものぢや。　問うて來い。

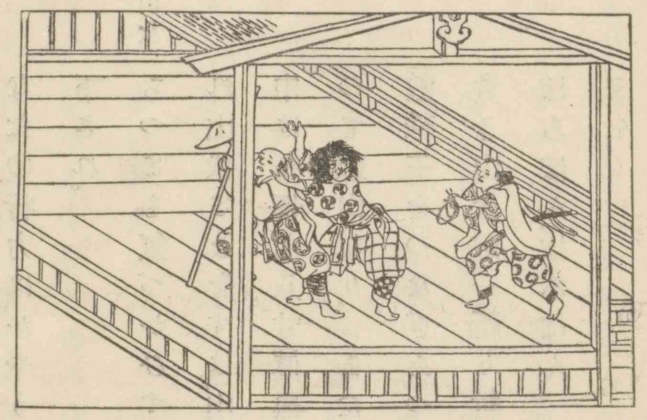
強力　いやいや、私はいやでござる。　こなたこそ行つて問はせられ。

山伏　汝を連れるのは何の爲ぢや。　行つて問うて來い。

強力　いやいや、何程仰せられても、こればかりはなりませぬ。　こなたござれ。

山伏　汝は臆病な奴ぢや。　やい、其處な奴。　汝は興がつた姿ぢや。何者ぢや。

かに　兩眼天にあり、一甲地に伏す。　大足二足、小足八足、右行左行し



蟹　山　伏

て遊ぶものぢや。汝行力を慢ずるによつて、これまで現れ出でてあるぞとよ。

山伏　さては、彼奴めは蟹ぢや。　やいやい、強力、彼奴は知れた。　蟹ぢやは。

強力　何と仰せらるる。　蟹ぢや。　それなら私次第になされ。　はてさて何ものぞと思うて、よい肝をつぶした。　うぬ、この金剛杖で甲を打割つてくれうぞ。　おぼえたか、おぼえたか。　まだ仕様がある。　鼻竹篦をあててやらうぞ。　あゝ悲しや、あゝ悲し

や。蟹がはさみました。あいた、あいた、あいた。なうなう、こなたの行力は、かやうの時のためでござる。早う祈り退けて下され。

山伏　ちつとも氣づかひすな。今の間に祈り退けて遣らうぞ。それ山伏とまをすは、山に寢起をするゆゑに山伏なり。此の頭巾は、布切七八寸眞黑に染め、襞(ひだ)積を折つて頭にいたゞくによつて頭巾なり。またこの數珠は苛高(いらたか)ではなうて、むしやうな數珠玉をつなぎあつめ、これを苛高の數珠と名づく。かほど貴き山伏が、一祈り祈るものならば、などか奇特のなかるべき。ぼろぼん、ぼろぼん。いろはにほへと、ぼろぼん、ぼろぼん、ぼろぼん。

強力　まをし、まをし、もはや祈らずとおいて下され。こなたの祈らせらるれば、猶きつうはさみます。あいた、あいた、あいた。

山伏　何と、なほ締めると言ふか。待て、待て、仕樣がある。印を結んでかけて、今一祈り祈つて、祈り退けてやらう。（結印）如何に惡心の深い蟹なりとも、今一祈り祈るなら、などか奇特のなかるべき。ぼろぼん、ぼろぼん、ぼろぼん。橋の下の菖蒲は、ぼろぼん、ぼろぼん。誰が植ゑた菖蒲ぞ。ぼろぼん、ぼろぼん、ぼろぼん。

山伏　あいた、あいた、あいた。これは南無三寶、己が耳も挾み居つた。あいた、あいた。

かに　ひやあり、ひやあり、ぼつぱい、ひやろひい。

二人　やれ、蟹めが逃ぐるは。やるまいぞ、やるまいぞ、やるまいぞ、やるまいぞ。（續狂言記）

今日　平治元年(一八九)十二月二十七日。

櫨匂　鎧のをどしの上方をはじ色にし次第にぼかして下を白くしたもの。

龍頭の兜

小烏　平家重代の寶刀。

黄桃花毛　黄を帶びた紅色。

樊噲　漢の高祖の臣、勇猛の士。

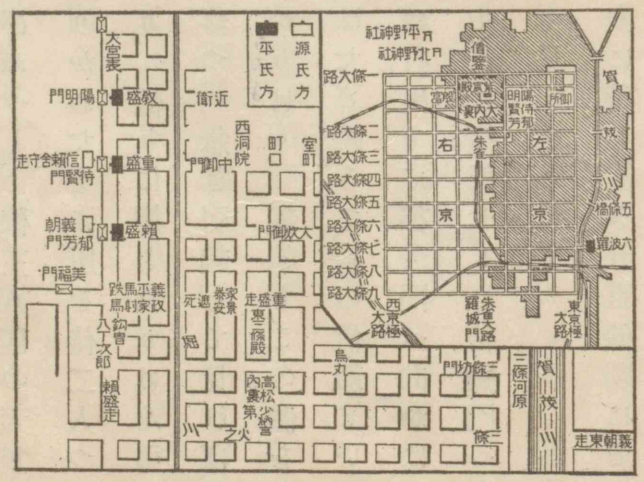
張良　漢の高祖の臣、智謀の士。

一六　待賢門の戰

左衞門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に櫨匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締めて、小烏といふ太刀を帶き、切斑の矢負ひ、滋籐の弓持つて、黄桃花毛なる馬に、柳櫻摺つたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛のたまひけるは、「年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。誰か爰に樊噲・張良が勇をなさざらん。」とて、三千餘騎を三手に分つて、近衞・中御門・大炊御門、大宮表へ打出で、陽明・待賢・郁芳門へ押寄せたり。大内には南・西・北の三方の門をさし固め、東表をば開かれたり。承明・建禮の脇の小門をも共に開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。梅壺・桐壺・

紫宸殿の前後まで兵ひしとなみ居たり。皆源氏勢なれば、白旗二十餘流打立つたり。大宮表には平家の赤旗三十餘流差しあげて、勇み進める三千餘騎一度に鬨をどつと作りければ、大内も響き渡つて夥し。

「鬨の聲に驚いて、只今までゆゝしく見えられつる信頼卿、顏色變りて草葉の如くにて南階を下られけるが、膝戰いて下りかねたり。」人なみなみに馬に乘らんと引寄せさせたれども、太りせめたる大の男の大鎧は着たり、馬は大きなり、乘煩ふ上、主の心には似も似ず、逸り切つた



待賢門戰要圖

る逸物なれば、つと出でん、つと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかりにて、乘りかねたまふ所を、侍二人つと寄つて、「疾く召し候へ。」とて押上げたり。餘りに押したりけん、弓手の方へ乘つこして、伏し樣にどうと落つ。急ぎ引起して見れば、顏に砂ひしと附き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝もこの體を見て、日頃は大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、「あの信賴といふ不覺人は臆したりな。」とて、日華門をば打出でて郁芳門へ向かはれければ、信賴も鼻血押拭ひ、とかくして馬に搔乘せられ、待賢門へ向かはれけるが、物の用にあふべしとも見えざりけり。

左衞門佐重盛五百餘騎をば大宮表に殘し置き、五百餘騎にて押寄せて呼ばはり給ひけるは、「この門の大將軍は信賴卿と見るは僻

穆王　支那周代の王。八匹の駿馬を驅つて天下を周遊したといふ。

信賴　藤原氏。源義朝と共に平治の亂の主謀者。戰敗れて斬られた。年二十八。

目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳清盛が嫡子左衞門佐重盛、生年二十三。」と名のり懸けければ、信賴返事にも及ばず、「それ防げ、侍ども。」とて引退く。大將の引き給ふ間防ぐ侍一人もなし、我先にと逃げければ、重盛愈、勇みて、大庭の椋の木の下まで攻附けたり。義朝之を見て、「惡源太はなきか。信賴といふ大臆病人が待賢門をはや破られつるぞや。あの敵追出せ。」と宣ひければ、「承り候。」とて驅けられたり。續く兵には鎌田兵衞・後藤兵衞・佐々木源三・波多野次郎・三浦荒次郎・須藤刑部・長井齋藤別當・岡部六彌太・猪俣小平六・熊谷次郎・平山武者所・金子十郎・足立右馬允・上總介八郎・關次郎・片桐小八郎大夫以上十七騎、轡を雙べて馳せ向ふ。

大音聲を揚げて、「この手の大將は誰人ぞ。名のれ、聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が嫡子鎌倉惡源太義平と

太宰大貳　太宰府の長を帥といひ、次を大貳といふ。權帥を置いてからは大貳があれば權帥を置かず、權帥があれば大貳を置かなかつた。

惡源太　義朝の長子、義平。

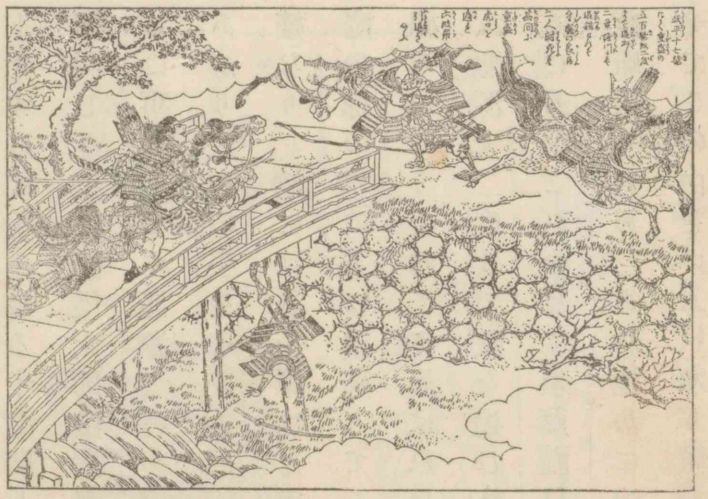
大藏　武藏國比企郡菅谷村の大字。

帶刀先生　兵仗を帶びて東宮に侍する武官を帶刀といふ。先生はその長官の稱。

申す者なり。生年十五歲、武藏の大藏の軍の大將として叔父帶刀先生義賢を伐ちしより此の方、度々の合戰に一度も不覺の名をとらず。年つもつて十九歲。見參せん。」とて、五百騎の眞中に割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、竪樣横樣十文字に敵をさつと蹴散らして、「端武者どもに目な懸けそ、大將軍を組んで擊て。櫨の匂の鎧に蝶の裾金物打つて黃桃花毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。押雙べて組んで落ち、手捕りにせよ。」と下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども、與三左衞門、新藤左衞門を始として百騎ばかりが、中にぞ隔りける。惡源太を始として十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻して、組まん〳〵とぞ揉うだりける。十七騎に驅けたてられて、五百餘騎叶はじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。

筑後守　平家貞。

平將軍　平貞盛。藤原秀郷と協力して平將門の亂を平げ武名をあげた。



義平重盛を堀川に追ふ

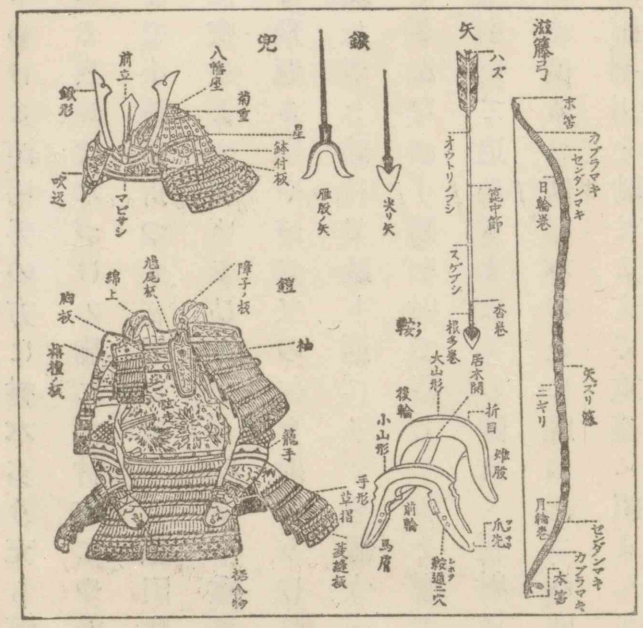
大將左衞門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つと參りて、「曩祖平將軍の二たび生れ替り給へる君かな。」と向ふ樣に譽め奉れば、今一度駈けて家貞に見せんとや思はれけん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻寄せたり。また惡源太駈向ひ、見まはしていひけるは、「只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ

須藤瀧口（瀧口は職名。禁中の警衛を掌る。）

洩すとも今度に於ては餘すまじ。押雙べて組んで捕れ、兵ども。」と下知すれば、勇みたる十七騎われ先にと進みければ、今度は難波次郎・同じき三郎・瀬尾太郎・伊藤武者を始として、百餘騎が中に隔てたるに、事ともせず、悪源太、弓をば小脇に搔いはさみ、鐙踏張り突立ちあがり、左右の手を擧げ、「幸に義平源氏の嫡々なり、御邊も平家の嫡嫡なり。敵には誰か嫌はん、寄れや、組まん。」といふ儘に、先の如く大庭の椋の木の下に追廻して五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、又大宮表へ引いて出づ。

悪源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、「汝が不覺に防げばこそ敵度度駈入るらめ。あれ速かに追出せ。」といひ遣はされければ、俊綱馳せてこの由をいふに、「承り候。進めや、者ども。」とて色も替らぬ十七

騎、大宮表に駈出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、「我が子ながらも義平はよく駈けたるかな。あ、駈けたり。」とぞ譽められける。



武具圖

束へ引かれければ、悪源太鎌田にきつと目合はせて、「爰に落つるは

堀川　大宮の東の通。名の如く堀がある。

唐皮　平家重代の鎧の一。虎の皮でをどしたので此の名がある。

大將とこそ見れ。返せや。」とて追つかけたり。既に堀川にて追つめけるが、弓手の方に材木多く充ち滿ちたるに、惡源太の乘り給へる馬かたなづけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手の方へけし飛んで、小膝を折つてどうと伏す。鎌田兵衞延ばさじと、十三束取つて交ひ、よつ引いてひようと射る。重盛の射向の袖にはたと中りて飛返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちようと中りて、箆かづき碎けて跳り返れり。惡源太「これは聞ゆる唐皮といふ鎧ござんなれ。馬を射て、落ちん所を擊て。」と下知せられければ、又よつ引いて追ひざまに筈の隱るゝ程射込みたり。馬は屛風を返す如く倒るれば、材木の上に跳ね落され、兜も落ちて大童になり給ふ。鎌田、堀川を馳せこえて、重盛に組まんと落合ふ。重盛近づけては叶はじとや思はれけん、弓の弭にて鎌田が兜の鉢をちようと突く。

紀信　漢の高祖が、滎陽（河南省開封府の南）に於て事急であつた時、紀信が身代りとなつて之を救つた。

突かれてゆらふる間に、兜を取つて打着つゝ緒を強くこそ締められけれ。

與三左衞門（よさのさゑもんの）馳せよつて中に隔り申しけるに、「漢の紀信は高祖の命に代りて滎陽の圍を出し、終に天下を保たせき。『主辱しめらるる時は臣死す。』といふにあらずや。景安爰に在り、寄れや、組まん。」といふ儘に、鎌田兵衞と引組んで取つて押へける處に、惡源太馬引起し、これも堀川を馳せこえて、重盛に組まんと跳んで懸りけるが、「鎌田をや助くる、大將をや擊たん。」と思案しけれども、「大將には又も寄せ合ふべし。政家を擊たせては叶はじ。」と思ひ、與三左衞門に落ちあうて三刀刺して首を取る。重盛は「賴み切つたる景安擊たせて命生きて何かせん。」とて既に惡源太と組まんとせられけるを、進藤左衞門馳來り、「家泰が候はざらん處にてこそ大將の御命をば捨て

たまふべけれ。」とて我が馬を引向け、中に隔てて惡源太とむずと組む。政家は重盛に組まんとしけるが、主を擊たせては叶はじと思ひければ、進藤左衞門に落重なつて首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかばたすかり難き命なり。（平治物語）

平治物語　平治の亂を書いた戰記物語。鎌倉室町時代のもの。作者未詳。

高山樗牛　名は林次郎。山形縣の人。文學博士。明治三十五年歿、年三十二。

重盛　平清盛の長子。內大臣。世に小松殿と云ふ。治承三年（一八三九）歿、年四十二。

一七　平重盛論

高山樗牛

小松內府重盛は、げに智仁勇兼備の大臣なりき。たゞその理に明かなるに較ぶれば、その意は寧ろ弱く、その情は寧ろ脆かりき。彼がその材能を發揮して遺憾なからんがためには、少くとも更に數層の强烈なる意志を要すべかりしなり。加ふるに早く佛說に歸依して現世の無常を觀ぜしがために、奉公の大義に於て聊か缺

くるところあるを免れず。この人にしてこの弊あり、洵に惜しむべし。

四十二年の齡は、重盛に於て決して短きものにあらざりき。平家の興るや、彼實にその樞軸たり。平家の榮ゆるや、彼實にその柱石たり。彼の一生は、その父入道とともに平家史の大半を語るものなりき。清盛心剛に情强く、眞に一世の豪傑なりしかど、その事をなすに當りて、重盛に待たざること殆ど一度だにもあらざりき。戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ、帷幄に參しては、籌を百里の外に運らし、世靜まれば儀禮彼に於て備はり、道衰ふれば大義彼

高山樗牛

によりて正されき。彼はたゞに平家一門の柱石たりしのみならず、また世道の儀表たり君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし、而して重盛は實にその人傑の第一人なりき。

悪源太義平と紫宸殿の階下に鬪ひし重盛は、いかに勇ましかりしよ。彼武藝に於て人後に落つるものにあらざりき。信頼平家の不在を窺うて亂を起すや、熊野參詣の途上にありてこれを聞きし清盛を始め平家の一族は、寧ろ西國に走りて再擧を圖らんと欲したりき。かの時平家にして直ちに都に歸らざりせば、天下のこと未だ俄かに知るべからざるなり。この時に當りて衆論を排して入京を主張し、大義名分を唱へて士氣を鼓舞したるは實に重盛なりき。されば平治の戰功を論ずれば、當に功一級たるべきもの實に重盛なり。たゞこの一勝によりて、今や平家はさながら旭日

義平　源義朝の長子。平治元年（一八一九）歿、年二十。

信頼　藤原氏。平治元年（一八一九）歿。

資盛　重盛の次子。この時伊勢國に逐はれた。

攝政　藤原基房。

鹿が谷　比叡山の麓にある。

昇天の勢ありき。さればこの氣運を致したる重盛こそは、正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。

世は既に平家の世となりて、四海の權柄、入道が掌裏にあり。重盛が天分益〻その高きを加へぬ。今や彼は一武弁にあらずして、朝廷の輔弼たり。公私・内外の間に處して君國の大事を辨ずべきもの、實に彼を措いてその人なかりき。その男資盛、攝政の儀仗を冒して辱められし時、入道は大いに怒りて暴慢の復讎を試みしが、重盛は深く慚愧し、資盛を放つて世に謝しき。鹿が谷の事ありて成親の斬られんとせし時、一國の重

平重盛

四恩　天地の恩・國王の恩・父母の恩・衆生の恩。一說には、父母の恩・師長の恩・國王の恩・施主の恩ともいふ。

臣、私門の成敗に任ずべからざるを說破せしも重盛なりき。事延いて法皇幽閉の擧に出でんとするや、四恩の妙理を引いて君臣の大義を訓へしものまた重盛なりき。入道が我執の一念は幾度かこれがために沮まれて、君國のことために僅かに安らけきを得たり。かゝる間に忠孝の兩全を期し、公私の事なきを謀れる重盛が心事のいかばかり苦しかりしかは、察するに餘りありといふべし。あはれ入道が榮華は壯大窮まりなかりしが、その裏面にはその愛子を犧牲とせる慘憺たる悲劇ありき。

重盛年なほ壯にして夙に厭世の心を動かし、早く佛說に歸依して來世を希求せしもの、その際遇の自ら然らしめしところ、その情や深く憐むべしとせん。

大義滅親

熊野　紀州熊野の三所權現。

然れどもこの佛說に歸依せることは、重盛にとりて寧ろ恨事なりきと謂はざるを得ず。彼、身は一國の大臣として奉公の大義を辨ずべきもの、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて後已むべきなり。洵に忠孝兩全し難くして、骨肉の私情さすがに絕ち易からざれど、事體の大小、云爲の先後、必ずしも辨じ難からず。何ぞ妄りに一身の安慰を冥々の後にのみ求むべしとせん。この難關に當りてよく効を擧ぐるもの、眞に人傑といふべきなり。重盛たるもの輕々しく事局を回避して、自ら全うすべからざりしなり。彼の熊野に禱る詞を見るに、要は一門の榮華永きを保たじ、寧ろ死してその末路に遭はざらんといふにあり。何ぞその願の私情に拘ること多くして、公義に盡すことの少きや。彼の一身は公私・內外の望の由つて繫るところ、君は以て泰きを得、父は以て正しきを得、洵に一門

の柱石、一世の儀表たり。彼死せば、入道が横暴はさながら悍馬の御に離れしが如くならん、帝座の危きや知るべきなり。彼死せば、一家の望立ちどころに世に離るべし。一旦事あらん日、誰かよく擁護の任に當るべき、一門の危きやまた知るべきなり。重盛已に一身を以てこの大局を保持し、居然としてその重きに任ず、何ぞ區區の私情のために逃避すべけんや。重盛その曠世の聰明を以て、如何ぞかばかりの理義を辨ぜざらんや。辨じて而してなほこれを敢へてせざるものは、これその情は寧ろ脆く、その意は寧ろ弱くして、遂に佛説に歸依したるの致すところと謂はざるべからず。これ重盛にとりて一大恨事にあらずして何ぞ。

世の忠孝の龜鑑として重盛を論ずるものは、吾人の同意する能はざるところなり。その情や誠に憐むべし、その行は則ち大いに

宗盛　清盛の次子。文治元年（一八四五）歿、年三十九。

文覺　俗名遠藤盛遠、正治元年（一八五九）歿、年八十。

未だし。殊に平家盛衰の側より見れば、自ら求めてその身を殺したるは、則ち自ら求めてその家を亡したるに等し。入道心剛なりと雖も、齡既に耳順を越ゆ。その身後に於て誰か一門統率の任に當るべき。凡庸宗盛輩のもとより爲すなきことは、重盛の明を待つて知らざるなり。加ふるに諸國の源氏外に機を窺ふあり、院宣一たび下らば、天下のこと俄に知り難し。重盛この危機に際して何ぞ自重せざりしか。文覺の賴朝に説ける言に曰く、「平家には小松の大臣殿こそ心も剛に謀も勝れておはせしか。平家の運命ここに極まれるか、去年の八月薨去せられぬ。今は何の憚るところぞ。御邊一たび起つて麾かば、天下靡然として從はん。」と。平家の存亡一に重盛の上に懸りしこと、また以て想ふべきにあらずや。あはれ、世はいかにもなりなん。たゞ力を盡し忠を勵みてもなほ

及ばざらん時、かねて亡き身のせんすべなからめや。さるを君父を捨て一門を捨て、偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。吾人こゝに至りて遂に重盛を辯護するの辭を知らざるなり。

（樗牛全集）

高崎正風
鹿兒島の人。御歌所長。男爵。明治四十五年歿、年七十。

こるしか島
地中海中の一島。佛蘭西領。ナポレオン一世の生地。

落合直文
仙臺の人。萩の舍と號す。明治三十六年歿、年四十三。

一八　若國日本

うぐひすの木づたふかげは見えねども聲する方に散るさくらかな　　高崎正風

しほなわのこるしか島のひとつ松世をおほはむと思ひかけきや　　落合直文

母の背にむかしながめし我が身とは知るや知らずやふるさとの月　　正岡子規

萩寺の萩おもしろし露の身のおくつきごころ此處とさだめむ

くれなゐの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春の雨ふる　　伊藤左千夫

夜をこめて物書くわざのくたびれに火を吹きおこし茶を飲みにけり

四年寝て一たびたてば木も草もみな眼の下に花咲きにけり

うちわたす八十の群山もえ出づる若國日本年明けにけり　　伊藤左千夫

正岡子規
名は常規。竹の里人とも號した。松山の人。明治三十五年歿、年三十六。

伊藤左千夫
千葉縣の人。本名幸次郎。大正二年歿、年五十。

長塚節（たかし）
茨城縣結城の人。大正四年歿、年三十七。

島木赤彦
本名久保田俊彦。長野縣の人。大正十五年歿、年五十一。

よき日には庭にゆさぶり雨の日は家とよもして兒等が
遊ぶも　長塚節

張りかへむ障子も張らず來にければ暗くぞあらむ母は
目よわきに

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしと寢ねつたるみ
たれども　島木赤彦

まかがやくゆふやけ空の下にして凍らむとする湖のし
づけさ

やまみちに昨夜の雨のながしたる松の落葉はかたより
にけり

木下利玄（としはる）
岡山縣の人。子爵。大正十四年歿、年四十。

若山牧水
名は繁。宮崎縣の人。昭和三年歿、年四十四。

岡野養之助
大阪朝日新聞社員。本文は筆者が朝日新聞社軍隊慰問使として滿洲及び上海に派遣せられた時の記事である。

吳淞
上海を距る約十九粁、黃浦江が揚子江に合流する所にある港町。

江灣
上海北郊の一小邑。

ほしいまゝに伸びあがりたる波の重み倒れたゝまりと
どろと鳴るも　木下利玄

をちかたの鍛冶屋かねうつ音すみて秋やゝうごく八月
のすゑ　若山牧水

うら〳〵と照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山
ざくら花

幾山河越え去り行かばさびしさのはてなむ國ぞ今日も
旅ゆく

一九　上海の戰蹟

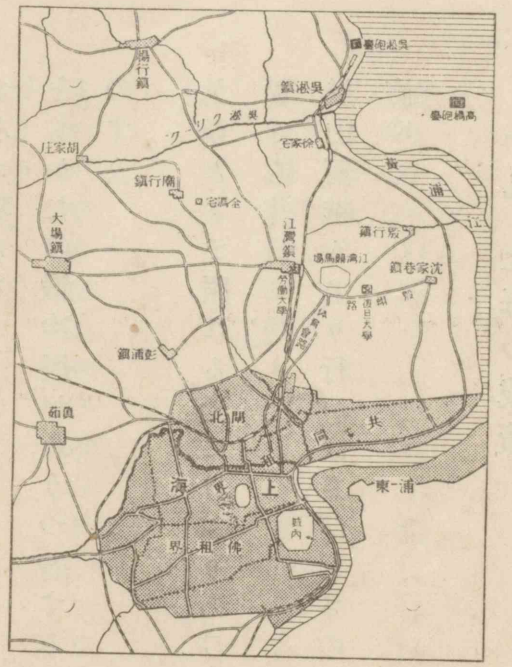
岡野養之助

吳淞（ウースン）の次に訪ねたのは江灣の戰跡である。新公園から體育會

松滬線　呉淞と上海北停車場とをつなぐ鐵道。

十九路軍　蔡廷楷の指揮する軍。

路と殷翔路の交叉點に出ると、右が復旦大學に江灣競馬場、左が淞(せう)滬線の江灣停車場に、その向ひの勞働大學、少し先に壞滅した江灣鎭の町がある。競馬場の時計臺はその儘殘つてゐるが、激戰の中心であつただけに、この邊の家は大小砲彈で壞されぬはない。復旦大學は我が第七師團司令部を置いたところ。勞働大學から江灣鎭にかけて二キロの間に斷續する堅固な煉瓦家によつて十九路軍六十一師と七十八師とが、勞働大學



上海附近

孫文　支那の政治家。字は逸仙。廣東の人。西暦一九二五年歿、年六十。

閘北　上海市の共同租界の北郊に境を接する支那町。

廟行鎭　上海の北方約十三粁にある田舍町。

三勇士　作江伊之助・北川丞・江下武二の三伍長。

クリーク　Creek. 堀割。上海郊外一帶の沃野に灌漑の爲め縱橫に掘つてあるもの。

の中庭の孫文の石膏像を守本尊として防禦陣地を死守し、その頑强なる抵抗は、遂に日本軍をして、敵陣地を樞軸とする右翼大旋回といふ世界の作戰史上に類例のない戰法を取らしむるに至つたのである。

外國武官の觀測では、日本軍は閘北(ザホク)と江灣の間を突破するものと思つてゐたらしい。しかしこれも敗兵を租界に亂入させてはならぬといふ遠慮で差控へ、競馬場の敵を鐵道線まで壓迫して、この大膽なる戰法を敢行し、廟行鎭の三勇士を始め多大の犧牲を拂つた血戰によつて目的は完成された。

軍參謀の話に、今度の上海戰の如き戰法を試驗答案に書いたら皆落第點だといつたほど、總て惡い條件が揃つてゐた。なるほど巡つて見ると、水、水、水で、うるさいほどクリークが蛇の如くにうね

つてゐる。自動車で通ると氣付かぬが、實戰となれば大障害であつたらう。第一戰車が通らぬ。江灣の戰で戰車が水のために動かなくなり、敵前を綱で引張り戻したり、クリークに架した橋を石橋だからと安心してゐると、戰車が橋諸共に河に墜ち、あの重いものを高い岸へ運び上げるに大汗をかいた。

陣地戰のため三勇士などの爆破作業も激しかつたが、クリークのための渡河作業に隨分工兵は苦勞した。吳淞クリークでは、彈丸雨飛の中を軍橋架設の餘裕がなく、十幾名の工兵が、いきなり長い板を支へながら、二月の寒天に素ッ裸で飛込み、人間の橋柱を造つて歩兵を渡した。歩兵は工兵の頭を踏むに忍びず、靴を脱ぎかけた。工兵が怒鳴つた。

「馬鹿！敵前だぞ。おれ達の頭や手が何だ。死んでもこの柱は倒れない。早く渡れ。」

歩兵が口々に「濟まんな、濟まんな。」といひながら岸に飛上るや、阿修羅の突進。この優しさと、この勇氣、この犧牲の精神、これが日本軍の强さである。

水に次いでは墓だ。此の邊の土饅頭は滿洲のに比べるとずつと大きい。それが到る所につぶ〳〵と平野に亂雜な瘤を造つてゐる。守る方には塹壕構築に利用されるが、進擊者には邪魔になる。水を利用するので道路が少く、卑濕な地が多くて、砲の曳行には不便である。その他煉瓦の家が皆絶好の防禦壁になる等々。まして面倒臭い國際關係や、市街戰、便衣隊、河口の砲臺など、條件はどこまでも惡い。しかしこの所謂落第の答案を陸海協力の勇氣で優等點まで押上げた。餘り戰が激しいと、時に後方から、

「貴隊は強ひて多大の損害を犯し前進するに及ばず。」と親が子を心配するやうな傳令が來る、が兵が聽かない。「なあに、くそッ。」とずん〳〵進んで行く。これも日本軍の強さだ。

江灣鎭の町から附近一帶には月世界を見るやうに大小爆彈の穴がある。大きいのは徑二十間にも亙りさう。その近くにまた我が砲彈の三點齊射の痕が鮮かに讀まれる。手擲彈や不發砲彈がまだごろ〳〵してゐた。地雷の危險もあり、整理の兵が負傷した話もあつた。クリークの突角に行くと、大場鎭の方へかけて二重三重の塹壕が、マンモスの腸をゑぐつて列べたやうに續いてゐる。

マンモス　古代に棲息してゐた巨象。

塹壕內には血に染つた軍服・帶革・水筒・懷中電燈・カンテラ・軍服・笠・食器類など、殊にごろ〳〵になつた布團の散亂してゐるのが異樣

に感ぜられた。如何にも支那兵らしい。四十七度の國內合戰に一度もひけを取らず、戰爭に經驗のない日本軍が何だと、馬鹿に鼻息の荒い十九路軍が、籐で編んだ百姓笠を枕に布團にくるまつてカンテラを手にしてゐるところを想像すると、どうしても山賊の群としか映つて來ない。月給も渡らぬのに督戰隊のピストルに脅迫されながら、機銃を構へて相當頑强に戰ふといふのだから、日本人にはどうしても謎である。杜少陵の兵車行にも「況や復た秦兵苦戰に耐ふ、驅らるゝこと犬と鷄とに異ならず。」とある。追立てられて戰ふのは先祖代々の遺法であらう。

杜少陵　杜甫。唐代の詩人。

兵車行　況復秦兵耐二苦戰一。被レ驅不レ異二犬與レ雞一。

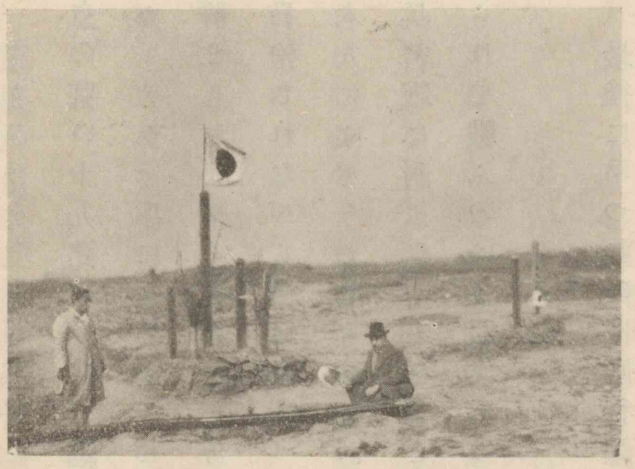
最後に弔つたのは廟行鎭の戰跡である。金馮宅の村を過ぎると一面の麥畑、一キロ向ふに竹藪と一團の林があり、楡（にれ）の大木に圍

一夫以て萬卒に當る
一夫當レ關萬夫莫レ開。（李白、蜀道難）

東島
東島時松。工兵少尉。三勇士の屬した小隊長。

森田大隊
森田徹少佐指揮。下元旅團に屬する。

まれて廟が見える。近づくとクリークの水を塹壕構築のために堰いた水たまりがあり、これを中心に堅固な陣地が築かれてゐる。鐵條網・塹壕・水、そのまた後に小高い塹壕と來てゐるから、なるほど「一夫以て萬卒に當るの要害」である。



三勇士の墓（右は筆者）

三勇士爆破の個所は水の傍で、一本の墓標が立てられ、「嗚呼忠勇義烈三勇士之靈」、裏に「東島小隊長自書」とある。日本兵の急造壕は十米の近さまで迫つてゐるが、森田大隊の突撃路はちよつと離れ

碇大隊
碇善夫少佐指揮。（下元旅團に屬する）東島小隊は此の大隊に屬した。

爆撃隊
東島少尉指揮の第二破壞隊を指す。同隊は第一班（三組に分る）・第二班（二組に分る）に分れその第二班第一組が三勇士を以て編成されてゐた。

てゐて見えない。水たまりから三四十米後方の土饅頭に立つて見渡すと、その邊一面に澤山の穴がある。砲彈の穴ではない、當時決死の工兵が身を伏せた穴だ。この穴一つ〳〵には、實に肺肝を絞る愛國の熱血が注がれてゐるのだ。十七夜の殘月の下に敵陣を睨みながら、身體を劍の如く鋭くして臥せてゐた彼等の姿が、眼前に浮ぶ。後には枚を銜んだ碇大隊が幾つかの縱列で、これまた地上に臥してゐる。爆撃隊第一班の第一・第二・第三組と、皆無念に斃れた。猛然と三勇士が起つた。

この瞬間の三人の魂は、既にその肉體を離れ、恐らく今私が立つて見てゐる如く、こんな高い所から「自分の肉體を驅使して、奮激突進、鐵條網を爆破する光景を見下してゐる一つの崇高なる神」となつてゐたらう。斷じて行へば鬼神これを避くの魄力に對し、敵彈

もその暴威を喪つた。「肉體を驅使する魄力」、これが今度の戰爭に現れた總ての勇士の姿である。そしてそれを端的に最も華やかに顯揚したのが三勇士である。

將軍達が口を揃へていつた言葉は「近來の若い者の浮薄な氣風を見て、實はあれで戰爭が出來るかと竊かに心配したが、やつて見ると大違ひ、日清・日露兩役よりも遙かに優つた勇敢な戰爭が出來た。これで我々も大安心」といふのである。その通り、日本は確かに强い。そして强い戰をしたのは青年だ。この青年が今後の日本の難局に當らなくて誰が當る。願はくはこの氣力を以て、戰爭と同樣滿蒙問題・支那問題に善處してほしい。兩問題の研究には、どこまでも眞劍の態度が必要だと思ふ。從來のやうに、支那は謂はゆる支那通に任して置くといふのではいけぬ。普く國民の常識の中に、明瞭適切なる滿蒙及び支那の知識と對策とを織込まねば、本當の解決は出來ない。（大阪朝日新聞）

豐島與志雄
福岡縣の人。佛文學者。小說家。

二〇　梅花の氣品

豐島與志雄

梅花の感じは、氣品の感じである。

氣品は一の芳香である。眼にも見えず耳にも聞えない、或風格から發する香りである。甘くも酸くも辛くもなく、それらのあらゆる刺戟を超越した、得も云へぬ香りである。人をして思はず鼻孔をふくらませる無味無臭の香りである。それと明かに捉へ得ないが、それと明かに感じ識らるゝ一種獨得の香りである。何處からともなく、何故にともなく、何處へともなく、自らに發散して漂つてゐる浮游の香りである。

それはまた、梅花の香りである。うつすらと霧こめた未明の微光に、或は淋しい冬日の明るみに、或は佗びしい夕の靄に、或は冷々とした夜氣に、仄かに織込まれて、捉へ難く觸れ難く、たゞ脈々と漂つてゐる一種獨得の梅花の香りは、俗塵を絶した氣品の香りである。その香りを感じてその花を求めるのは、俗であり、愚である。花の在處を求めずに、漂ひ來る芳香に心を澄ます時、人は氣品の本體を識るであらう。

氣品はまた、一の凛乎たる氣魄である。衆に媚びず、孤獨を恐れず、自己の力によつて自ら立ち、驕らず卑下せず、霜雪の寒さにも自若として、己一身に微笑みかくる搖ぎなき氣魄である。肥大ならず、矮小ならず、膨脹せず、萎縮せず、賑かならず、淋しからず、たゞあるがまゝに滿ち足つて、空疎を知らず、漲溢を知らず、恐るゝことなく、

蔑むことなき、清爽たる氣魄である。

それはまた、梅花の氣魄である。霜雪の寒さを凌ぎ、自らの力で花を開き、春に魁して微笑み、而も驕ることなく、卑下することなく、爛漫たる賑かさもなく、荒涼たる淋しさもなく、たゞ靜かに己の分を守つて、寒空に芳香を漂はしてゐる姿は、まさに氣品そのものゝ氣魄である。しみ〴〵と梅花に見入るとき、恐怖や蔑視や悲哀や歡喜など、すべて心を亂すが如き情は靜まつて、たゞ氣高き氣品の氣魄に、人は自ら打たるゝであらう。

梅　花（眞道黎明氏筆）

氣品はそれ自身の性質からして、清淨なる白色たるべきである。赤や青や黃など、何等かの色に染められた氣品は、世に存しない。固より、赤や青や黃や紫など、さういふ色彩が持ち得る氣品はあるけれども、氣品そのものゝ色はどこまでも白色である。然し、單に白色のみでは足りない。純白の氣分を破らない程度に於て、何等かの點彩を要する。鮮かなる一點の色彩を包んだ純白、それが氣品の色である。

この氣品の色はまた梅花の色に見らるゝ。黎明や薄暮の微光の中に浮出す、ほの赤きまでの白色、白晝の外光や深夜の闇の中に浮出す、ほの蒼きまでの白色、または月光に照らし出さるゝ、薄紫にまがふまでの白色、その白色の花瓣の中に、花粉の黃を小さく點出した色彩は、氣品そのものゝ色彩である。これに瞳を凝らす時、人

は自ら心がすが〳〵しくなつて、氣品の妙趣を悟るであらう。

氣品には一の澁味があり、而も同時に一つの新鮮味がある。氣品は舊守でもなく、また新奇でもない。純粹の氣品は、骨董と新考案とを包含し、兩者を調和したものである。老と若と舊と新とを寄集めて、而もその何れでもなく、老と舊との澁味を取り、若と新との新鮮味を取來つた、一種恒久的なものである。古さから來る佶屈聱牙と、新しさから來る自由暢達と、この兩者を具有してしつくりと落着いたものである。

この落着きはまた、梅樹に見らるゝ。鋭角度をなしてぐい〳〵と曲つた古木から、すい〳〵と若枝を伸し、若きを育つる力を內に藏した老幹と、老を生かす力で伸上る若枝とが、しつくりと一つの氣分にまとまつて、苔むした古い樹皮と、艶々しい新たな樹皮とが、

—梅—

一様に花を咲かせてゐるのは、正に氣品そのものの姿である。老いたる枝と若き枝とを擇ばずに、一様に咲匂つてゐる梅花を眺むると、輕佻と鈍重とを超越した氣品の沈靜に、人は自ら味到することであらう。

氣品はこの世に稀である。それは地上のものといふよりも寧ろ多く天上のものである。この地上に在つては、その本來の面目を汚されるといふのではないが、在るにはあまりに清らかすぎる。然しながらそれを地上に引下して、己が所有とした所に、人の魂の朗かさがある。地上から天上へと人の魂が架け渡した、多くの橋梁の中の一つが、そこにあるとも云ひ得らるゝ。それ故に、氣品は一つの抽象であつて、一つの具象ではない。隨つて氣品は、如何なる人にも親しまれ易い。

梅花の感じは氣品の感じである。けれども梅花は、一の抽象でなくて具象である。それ故に人に親しまれ難い。餘りに芳しい香りを漂はせ、餘りに凛乎たる氣魄を示し、餘りに清らかな色彩を有し、餘りに妙味ある樹に咲くが故に、人間離れのした感じを以て人を却けがちである。然しながら、梅花に瞳を定めその香りに心を澄ますことは、必ずしも詩人に取つてばかりではなく、普通の人人に取つてもよい。なぜならばそれは、地上の息吹に天上の息吹を交へることだからである。新たな心を以て梅花に接し、新たな心を以て梅花に親しむことは、梅花には人間味が少いが故に、梅花が天上的であるが故に、益、人間に取つてよいのである。

この意味に於て、眞に梅花を觀るには、雜沓の巷や、廣い梅林や、人工的な盆栽や、または月明の夜などによりも、寧ろ自由な、晴れ〴〵

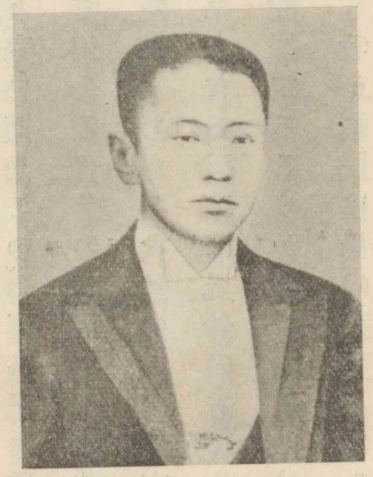
とした境地に於てがよい。必ずしも美景を要しないが、たゞ自然の風趣の害せられてゐない、のびやかな環境の中に、一本の老木が、自然のまゝの枝振りに、ぽつり〳〵と花をつけ、ほのかな香りを漂はしてゐるのを、少し冷かな二月の夜明け、薄霧の晴れやらぬころ、爽かな空氣を吸ひ、小さな霜柱を踏みくだいて、ふと氣付いたまゝ、何氣なく足を止めて、しみ〴〵と見入り嗅ぎ入る心持、それこそ眞に梅花を觀るの境地である。その一本の老樹のたゝずまひと、その清らかな花の姿と、その脈々たる香りと、その清冷な早朝の空氣とは、たゞ一つ梅花の氣品となつて、人の心にしみ通るであらう。それをも卑俗と云ふものは、卑俗のみを知つて高潔を知らぬ徒輩である。（旅人の言）

藤岡作太郎
東圃と號す。石川縣の人、文學博士。明治四十三年歿。年四十一。

二一　自然の愛好

藤岡作太郎

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豐饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美溫雅なる山川は常に瞼上に愛を湛ふるが如し。接する者はこれに親しみ、親しむ者はこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ者は愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民がその一木一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には食品・玩具などの多かる


藤岡作太郎

中に、露を帶びたる植木の葉の翠、花の紅こそカンテラの光に映えてみづ〳〵しく鮮かなるを、市民はあれこれと買求めて、座敷に飾り、庭に植ゑこむ。　裏長屋の道具の据所もなき窓前にも稗蒔作りて田舍の景色の面影を偲び、破れ鉢に田芋を育ててやさしき野趣を嬉しむ。　長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。　上下貴賤を通じて自然を愛好することかくの如きは他の國民にその匹ありや。

稗蒔

つりしのぶ

恐ろしき猪

和歌こそなほをかしきものなれ、あやしのしづ山がつのしわざも、いひいづれば面白く、恐ろしきゐのしゝもふすゐの床といへば、やさしくなりぬ。（徒然草）

我が國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず。　自然の愛すべきを見て、畏るべきを思はず。　野をも垣をも吹亂す二百十日の風も野分の名にやさしく、峰も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も深雪といへばみやびやかなり。「恐ろしき猪もふすゐの床と稱ふるにやさしく聞ゆ。」など兼好がいへるは、我等が自然に

兼好

姓は吉田。和歌文章に長じた。觀應元年（一三五）歿、年七十八。

源氏物語

紫式部著。五十四帖ある。平安朝の公家の生活を描いた物語。

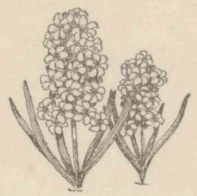
對する此の傾向を說明せるなり。　雨といへば照りつゞきたる夏などは嬉しけれど、一日の降も十日の照より飽き〳〵するに、卯の花くだし、時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。

自然の愛はかくして表はるゝのみならず、その名を借りて屢、人事に用ふ。　文學には源氏物語の卷の名に夕顏、末摘花、葵、榊、朝顏、胡蝶、螢、常夏、藤袴、若菜、柏木、鈴虫、紅梅等あり。　菓子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅燒、時雨など枚擧するに遑あらず。　今の刻煙草の名にも福壽草、白梅、皐月、あやめ、萩、紅葉等あり。　古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるも、やさしからずや。

我が國民は自然を愛賞する餘り、又よく之を尊重せり。　尊重するものには悅んで服從す。　彼等はみだりに人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。　此の服從を以て屈伏といふ勿れ。　悅

服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは不平なる奴隷が氣儘なる主人に對するが如く、悅服するものは從順なる兒孫が寛大なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。花に對する我等の趣味が如何に西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するより、峰に亙り川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もその儘に、願はくはこれに置く朝露をも落さゞらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡を助くるに、一は床上の盆石・盆栽に自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多

チューリップ


ヒヤシンス

女郎花

趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋の草花のチウリップ・ヒヤシンスなど、その葉に何の趣もなくしてその花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花・尾花、その花に何の美しきことかある。されど、あるかなきかの黄花を捧げて、なほたよ〳〵と下蔭の蟲の音にもゆらぐ樣、ますほの色はやがて白くほゝけて、露に濡れ風に靡く趣は、我が胸にしみて忘れられず。

日本人が花を愛するはその外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり。たゞちに自然の懷にわけ入つて、その眞意を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きはこれ日本國民の特性なり。（國文學史講話）

二二　國史に還れ

德富蘇峰

德富蘇峰　名は猪一郎。貴族院議員。熊本縣の人。東京日日新聞社社賓。

國史に還れ。　日本國の歴史は、大和民族の系圖である、吾人祖先の功科表である、日本帝國の寶庫である、日本國民の經典である。日本國を知るには、國史を透して知るより他に方便はない。　國史は實に忠實なる案内者である、信頼すべき指導者である。

吾人は歴史的に考慮せねばならぬ。　總ての人類は、平等觀よりすれば、皆同胞だ。　されど歴史觀よりすれば、總ての國は、皆特殊の性格を具へてゐる。　甲國と乙國とは同じからず、乙國と丙國とは同じからず、而して丙國と甲國ともまた同じからず。　十國あれば十個の相違があり、百國あれば百個の差異がある。　此の特殊の國性を維持する上に於て、始めて獨立國の意義が完くせられる。　獨立國の本義は、形式的に、他の干渉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではない、精神的に自主であらねばならぬ。　詳かに言へば、精神的に自國の國性を、把持し、保存し、開展し、發達させねばならぬ。

我が大和民族の誇は、日本の歴史である。　此の歴史は、必ずしも悉く皆正しき事、善き事のみではない。　必ずしも悉く敬すべく、仰ぐべき事のみではない。　人間は決して神樣ではない。　人間の所作には、樣々の過失もあれば、罪惡もある。　されど總括して云へば、日本の歴史は、大和民族の耻辱史ではなく、光榮史である。

如何に日本の皇室が、世界に比類なきありがたい皇室であらせらるゝかは、國史が最も雄辯に之を語つてゐる。　如何に日本の國民が、その一旦緩急に際して、護國の精神の猛烈に且勇敢であつたかは、國史がその證人である。　如何に大和民族の中に、世界的偉人

と比較して一歩も劣らぬ者、卽ち世界的偉人と稱するに足る者を生じたかは、長き歴史の中に、吾人の屢、接觸する所である。卽ち我が明治天皇の盛德大業も、國史の背景によつて、始めて明白に、精詳に、剴切に、之を會得することが出來る。五個條の御誓文の如きも、國史の背景なきに於ては、たゞ一種の雄快なる文書たるに止まるであらうし、帝國憲法の如きも、國史の背景なきに於ては、單に乾燥無味なる一部の法文に止まるであらう。

凡そ固陋頑冥の戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、若くは詭激狂妄の赤化主義や、架空浮誇の摸倣精神や、何れも我が國史を閑却したるに原因するといふを適當とする。現狀を株守するのも國史を知らぬがため、現狀に不安なのも國史を知らぬがため、自惚根性で醉生夢死するのも國史を知らぬがためである。

「國史に還れ。」とは、總ての國民が、歴史家となれと云ふではない。それには專門の學者がある。たゞ日本國民として、日本の歴史の、その大なる筋道を諒解せよと云ふのみ。人或は日本には、地中の鑛物が比較的稀少であると云ふ。されどその代りに、日本國民は豐富なる歴史を持つてゐる。此の歴史は日本の精神の潛在せる寶藏である。苟も國民的に生活し、且活動せんとせば、先づ此の寶藏に向つて、總ての物を求めよ。（國民小訓）

萩野由之　新潟縣の人。國史家、文學博士。大正十三年歿、年六十四。

洞院公定　藤原氏。左大臣從一位に至る。應永六年(一三九九)歿、年六十。

難太平記　今川了俊の著。了俊は足利義詮・義滿に仕へた。

太平記抄

後篇

萩野由之

太平記に就いて

太平記ほど世に不可思議なる書はあるまじきなり。名づけて太平記と云ふからには、時津風枝を鳴らさぬ御世のあらましを記せるかと見れば、さにはあらで、花園天皇の文保二年に筆をおこし、後村上天皇の正平二十二年にとぢめたり。其の間約五十年は、世に南北朝時代と稱する酣戰の亂世なり。この書名は、洞院公定公日記・難太平記などに見えたれば、古より太平記と呼びなせるに、別に安危由來記・國家治亂記・國家太平記など云ふ名もありといへど、據る所明かならず。いづれにもせよ、亂世を記して太平の記と云ふ、御世を祝ぎたるか、諷せるか、抑、亂世を刺れるか、先づ不可思議の一つなるべし。

此の書、何時の頃、如何なる材料によりて、如何なる人の書き殘しけん

玄惠　叡山の學僧。後醍醐天皇の侍讀。

小島法師　傳未詳。

篠村八幡の願文　足利尊氏が山城國篠村の八幡宮に北條氏討滅の願文を奉るとて僧妙玄に筆を執らせた文章。

こと、諸説ありて確かならず。何の卷より何の卷までは玄惠の作なりとか、又は小島法師の作なりとか、學者の考へし所もあれど、今は皆確かに知り難し。今の世ならば、其の來歷に於て、既に出版業者も引受けまじき代物ならん。然るに著作の當時、出版術も未だ開けざりし時代より、既に上は王侯より下は士民の卑しきに至るまで、上下一般に賞翫せられ、應安の昔「天下に翫ぶ太平記」といはれてより、今に長く天下の愛讀書たり。名も知れぬ人の手に成りて、かく永劫の名譽を博す、これ不可思議の二つなり。

太平記の著者は、足利尊氏が篠村八幡の願文を評して、「文章玉を綴りて詞明かに、理濃かなれば、神も定めて納受し御坐すらん。」といへり。願文は蓋し著者の潤色を經たるものなれば、太平記作者の自賛と云ふも可なるべし。かく潤色を加へて、天下に愛翫せらるゝほどの書は、その弊として、小説と一般、多くは世道人心に益なく、何等の效果をも遺さざるべきに、太平記は然らず。文章の妙もさることながら、又世道人心に裨益せしこと莫大なり。不可思議なることの三つなり。

太平記、世に出でて後五百年、天下の人心を動かしたる力は偉大なり。殊に德川幕府の末にありて、所謂勤王の志士を鼓舞し、七百年來の武家政治を、二十年の一刹那に亡ぼし、世を建武中興の昔に返し、又神武創業の古に復せり。これ亦太平記の感化なり。太平記なかりせば、南朝回顧の思想起らず、南朝回顧の思想なかりせば、いかで王政復古の大業成らんや。卑賤無名の手に成りて五百年後に社會改造の原動力となる。げに難太平記に所謂「宮方深重の作者」が、勤王心凝結の力ならんか。これ亦不可思議の四つなり。

近世、太平記の史實を疑ふものありて、今に學者の議論絶えず。先年菅政友氏の「太平記の謬妄遺漏多き事を辯ず」と云へる論、久米邦武氏の「太平記は史學に益なし」といへる論出でてより、稗史小説の類と見做され、史學家の取るべからざるものの如く云はれしが、近頃は又太平記の記事を肯定すべき多くの文書出でて、疑を挿むべき餘地なしと喜べる學者も少からず。一褒一貶、學界は走馬燈の如く變遷せり。よしや誤多き記錄とは云へ、この書なかりせば、如何なる古文書學者も、何により

て文保・正平五十年史の考證を成すことを得べけん。如何なる史家も、何によりて時運の推移を觀察する智識を得らるべき。要するに南北朝史の智識はこの書によりて扶植せられしものなり。然るに或時は無益の書と云はれ、或時は杜撰と云はれ、又或時は貴重の書と云はる。而して太平記の光輝は學者の褒貶に蔽はれずして常に赫灼たり。これ不可思議の五つならずや。

太平記は、かく過去現在に於て不可思議なる書なり、將來に於ても亦不可思議の功力あるは知るべきのみ。そは之を能く讀む人の自ら覺る所ならん。（史話と文話）

俊基朝臣　藤原氏。種範の子。元弘二年（九九二）鎌倉で斬られた。

先年　後醍醐天皇の正中元年。

土岐十郎頼貞　美濃の人。俊基朝臣等と謀り北條氏を滅ぼさうとした。

七月十一日　後醍醐天皇、元弘元年（九九一）。

落花の雪　またや見ん交野のみのの櫻狩花の雪ちる春のあけぼの（新古今、藤原俊成）

交野　大阪府北河内郡、淀川の畔。

紅葉の錦　朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき（拾遺、藤原公任）

一　俊基朝臣再び關東下向の事

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、樣々に陳じ申されし趣、實にもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、專ら隱謀の企、彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ儲けてぞ出でられける。

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦を衣てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも、旅寢となればものうきに、恩愛のちぎり淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行くへも知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思は

打出の濱　大津市の松本・石場邊の古名。

駒もとゞろと　貢物たえずそなふる東路の勢多の長橋音もとゞろに（風雅集、平兼盛）

うねの野に　近江より朝たちくればうねの野に田鶴ぞなくなる明けぬこの夜は（古今、大歌所御歌）

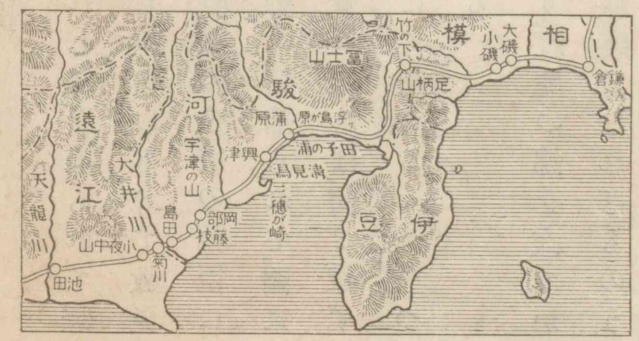
時雨もいたく　白露も時雨もいたく守山は下葉のこらず色づきにけり（古今、紀貫之）

篠原　滋賀縣野洲郡。

鏡の山　鏡山いざたちよりて見て行かん年へぬる身は老いやしぬると（古今、大伴黒主）

ぬ旅に出で給ふ心のうちぞあはれなる。

憂きをば留めぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、未は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき船の浮き沈み、駒もとゞろと踏みならす、瀬多の長橋打渡り、行きかふ人に近江路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかとあはれなり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、泪に曇りて見えわかず。物を思へば、夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒をとゞめてかへりみる、



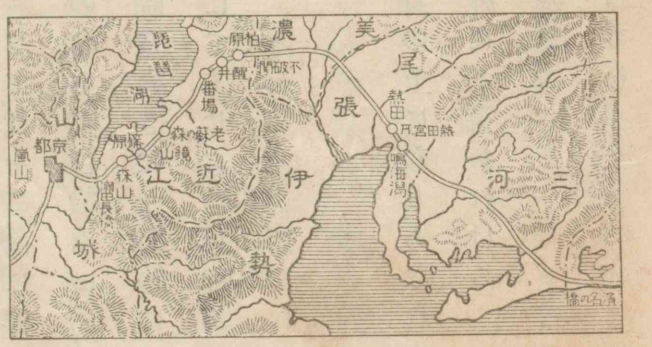
東海道

不破の關屋は　人住まぬ不破の關屋の板びさしあれにしあとはたゞ秋の風（新古今、藤原良經）

潮干に　さよ千鳥聲こそ近く鳴海潟傾く月にしほやみつらん（新古今、藤原季能）

故郷を雲や隔つらん。番馬・醒が井・柏原・不破の關屋は荒れ果てゝ、なほもるものは秋の雨の、いつか我が身の尾張なる熱田の八劔伏し拜み、潮干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、たれかあはれと夕暮の、いりあひなれば、今はとて、池田の宿につきたまふ。

旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に斷えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そこも知らぬ



地圖

夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、「命なりけり。」と詠じつゝ、再び越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける。　隙行く駒の足はやみ、日已に亭午に上れば、餉進らする程とて、輿を庭前に舁き止む。　轅を叩いて、警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎により、て、光親卿關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水、　汲下流而延齡。
今東海道菊河、　宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は、わが身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の
おなじながれに身をやしづめむ

命なりけり
年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山（新古今、西行法師）

承久の合戰
仲恭天皇の承久三年（一八六）。

光親卿
藤原光親。承久に院宣を書いた人。但し菊川で四句を書いたのは、中納言藤原宗行である。

南陽縣
南陽郡縣有甘谷。谷中水甘美。上有大菊、落水流下。谷中人家飲此水。上壽百二三十、其中百餘歳、七八十者則爲天。（風俗通）

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、亀山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は、二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。

島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦・楓いとしげりて道もなし。　昔、業平の中將の住所をもとむとて、東の方に下るとて、「夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。　清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三穂が崎、興津・蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干や淺き舟浮けて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車がへし、竹の下道行きなやむ、足柄山の巓より、

亀山殿
京都府葛野郡嵯峨にあつた離宮。

岡邊の眞葛
歸り來るほどはなけれど朝露の岡邊の眞葛うら枯れにけり（藤原爲家）

業平の中將
在五中將在原業平。元慶四年（一五四）歿、年五十六。

夢にも人に
駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり（伊勢物語）

上なきおもひ
富士の嶺の煙はほも立ちのぼる上なきものはおもひなりけり（新古今、藤原家隆）

七月二十六日　元弘元年（一九九一）。

笠置　京都府相樂郡。山城大和の國境。

類火云々　元弘元年九月二十八日の事。

主上　後醍醐天皇。

藤房　藤原宣房の子。建武中興の後遁世した。

季房　藤房の弟。北條氏の爲に下野に流され配所に死んだ。

十善　不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不惡口・不兩舌・不綺語・不慳貪・不瞋恚・不邪見。

大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそつきたまひけれ。（卷二）

二　主上笠置を御沒落の事

さる程に、類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々・卿相・雲客、皆歩跣なる體にて、いづくをさすともなく、足にまかせて落ち行き給ふ。この人々、はじめ一二町が程こそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく、道闇くして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第に別々になりて、後にはたゞ、藤房・季房二人より外は、主上の御手を援きまゐらする人もなし。忝くも、十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、そこも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有樣

赤坂　河内國南河内郡。正成がこゝに居た。

多賀郷　京都府綴喜郡。

有王山　多賀村と井出村との間にそびえる。

こそあさましけれ。いかにもして、夜の内に赤坂の城へと、御心ばかりを盡されけれども、假にもいまだ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ち止り、晝は道の傍なる青塚の陰に、御身を隱させ給ひて、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかうして、夜晝三日に、山城の多賀郷

笠置山附近

なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。

藤房・季房も、三日まで、口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて今は、いかなる目に逢ふとも、逃げぬべき心地せざりければ、せん方

なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣・兄弟諸共にうつゝの夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞し召して、樹蔭に立ち寄らせ給ひたれば、下露の、はら〳〵と御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

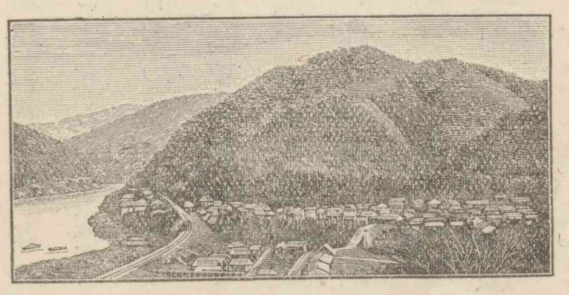
さしてゆく笠置の山を出でしより
あめが下にはかくれがもなし

藤房卿、涙をおさへて、

いかにせんたのむ蔭とて立ちよれば
なほ袖ぬらすまつのしたつゆ

山城の國の住人、深須入道・松井藏人二人は、この邊の案内者なりければ、山々峰々殘る所なく搜しける間、皇居、かくれなく尋ねいだされさせ給ふ。主上、誠

深須　異本には三栖とある。



笠置山

に怖ろしげなる御氣色にて、「汝等、心ある者ならば、天恩を戴きて私の榮華を期せよ。」と仰せられければ、さしもの深須入道、俄かに心變じて、「あはれ、この君を隱し奉つて、義兵を擧げばや。」と思ひけれども、後に續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして、道の成りがたからんことを憚りて、もだしけるこそうたてけれ。（卷三）

主上　後醍醐天皇。

志士仁人　志士仁人無ニ求レ生以害レ仁、有ニ殺レ身以成レ仁。（論語）

三　備後三郎高德が事

その頃備前國に兒島備後三郎高德といふものあり。主上笠置に御座ありし時、味方に參じて義兵を擧げしが、事いまだ成らざるさきに、笠置も落され、楠も自害したりと聞えしかば、力を失うてもだしけるが、主上隱岐國へ遷されさせたまふと聞きて、二心なき一族どもを集めて評定しけるは、「志士仁人生を求めて仁を害する事無し、身を殺して以て仁を成す事あり、」といへり。されば、昔衞の懿

公が北狄のために殺されてありしを見て、その臣に弘演といひし者これを見るに忍びず、自ら腹をかき切つて、懿公が肝を己が胸の中に納めて、先君の恩を死後に報いて失せたりき。義を見て爲さざるは勇無し。いざや臨幸の路次に參りあひ、君を奪ひ取り奉りて、大軍を起し、たとひ屍を戰場に曝すとも、名を子孫に傳へん。」と申しければ、心ある一族ども皆この議に同ず。さらば路次の難所に相待ちてその隙を窺ふべしとて、備前と播磨との境なる、船坂山の巓に隱れ伏し、今や〳〵とぞ待ちたりける。

臨幸あまりに遲かりければ、人を走らかしてこれを見するに、警固の武士山陽道を經ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり、遷幸を成し奉りける間、高德が支度相違してけり。「さらば美作の杉坂こそ究竟の深山なれ。こゝにて待ち奉らん。」とて、三石の山よりすぢ違

懿公が肝　韓詩外傳に見える。

義を見て見義不レ爲無レ勇也。（論語）

船坂山　兵庫縣赤穗郡。三石峠ともいふ。

今宿　姫路の西。今の高岡町の中。

杉坂　佐用郡江川村より美作に越す峠。

三石　岡山縣和氣郡。今鐵路に沿ふ。

に、道もなき山の雲を凌ぎて、杉坂へ着きたりければ、主上はや院の庄へ入らせ給ひぬと申しける間、力なく、これよりちり〴〵になりけるが、せめてもこの所存を上聞に達せばやと思ひける間、微服潛行して時分を窺ひけれども、然るべき隙もなかりければ、君の御座ある御宿の庭に大きなる櫻木ありけるをおし削りて、大文字に一句の詩をぞ書つけたりける。

天莫レ空勾踐。　時非レ無范蠡。

御警固の武士ども朝にこれを見つけて、「何事を、いかなる者が書

兒島高德（菊池容齋筆）

院の庄　津山町の西。

勾踐　越王。

范蠡　勾踐の臣。

きたるやらん。」とて、讀みかねて、卽ち上聞に達してけり。主上はやがて詩の心を御さとりありて、龍顏ことに御快く笑ませ給へども、武士どもはあへてその來歷を知らず、思ひ咎むることもなかりけり。（卷四）

大塔宮　尊雲法親王、卽ち護良親王。
般若寺　奈良市の北。
熊野　和歌山縣、今の東西南北の平婁郡の古稱。
赤松則祐　則村の第三子。延曆寺の律師。初め護良親王に從ひ後尊氏の叛に與した。
木寺相摸　勝憲。
村上彥四郎　義光。

四　大塔宮熊野落の事

大塔宮は南都邊の御隱家も叶ひ難ければ、乃ち般若寺を御出あり て、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林坊玄尊・赤松律師則祐・木寺相摸・岡本三河坊・武藏坊・村上彥四郎・片岡八郎・矢田彥七・平賀三郎、かれこれ以上九人なり。宮を始め奉りて、御供の者までも皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半に責め、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。この君もとより龍樓鳳闕の內に人とならせ給ひて、華軒香車の外

濱木綿

を出でさせ給はぬ御ことなれば、御步行の長途は定めて叶はせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御ことならねども、あやしげなる單皮・脚巾・草鞋を召して、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行逢ひける道者も、勸修を積める先達も、見咎むることなかりけり。

熊野地方

雨を含める孤村の樹
孤村樹色昏ニ殘雨ニ遠寺鐘聲帶ニ夕陽ヲ。（唐、盧綸）

切目の王子
和歌山縣日高郡切目村五體王子社。

兩所權現
熊野本宮・新宮。

びんづら

知らぬ涙路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。其の夜は叢祠の露に御袖をかたしきて、終夜祈り申させ給ひけるは、「傳へ承る、兩所權現はこれ伊弉諾・伊弉册の應作なり。我が君その苗裔として、今、朝日忽ちに浮雲のために隱されて冥闇たり。豈傷まざらんや。玄鑒空しきに似たり。神もし神たらば、君何ぞ君たらざらん。」と五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤、感應なゞかあらざらんと、神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、鬢結ひたる童子一人來つて、「熊

熊野三山
本宮・新宮・那智。

十津川
奈良縣吉野郡南部の廣大の地を往時十津川郷と稱した。熊野川の上流で今九箇村に分れてゐる。

山路もとより
荊溪出ニ白石ヲ。天寒紅葉稀。山路元無レ雨。空翠濕ヲ入衣ヲ。（唐、王維）

萬仞の青壁
向上則有ニ青壁萬尋。直下則有ニ碧潭千仞。（遊仙窟）

野三山の間は、なほも人の心不和にして、大義成り難し。これより十津川の方へ御渡り候て、時の到らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附け參らせられて候へば、御道しるべ仕るべく候。」と申すと御覽ぜられ、御夢はすなはち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、賴もしく思し召されければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、軈て十津川を尋ねてぞ分け入らせ給ひける。その道の程三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕を欹て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨無うして、空翠常に衣を濕す。向上ぐれば萬仞の青壁刀に削り、直下せば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を經させ給へば、御身も草臥れはてゝ、流るゝ汗水の如し。御足は缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御供の人々もそ

の身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れて、はか〴〵しくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を引きて、路の程十三日に、十津川へぞ着かせ給ひける。（卷五）

五　吉野城軍の事

さる程に、搦手の兵、思ひも寄らず勝手の明神の前より押寄せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つて懸りける間、大塔宮、「今は遁れぬ處なり。」と思し召し切つて、赤地の錦の鎧直垂に緋縅の鎧のまだ巳の刻なるを透間もなく召され、龍頭の兜の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挾み、劣らぬ兵二十餘人前後左右に立ち、敵の群つて控へたる中へ走り懸り、東西を拂ひ南北へ追ひ廻し、黑煙を立て斬つて廻らせ給ふに、寄手大勢なりといへども、僅の小勢に斬りたてられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へ颯とひく。

さる程に　元弘三年（一九九三）閏二月朔。
勝手明神　吉野山中にある。吉野八神の一。
宮　大塔宮護良親王。
藏王堂　吉野町の中央にある。
巳の刻　巳の刻は午前十時で物の新しい義。

敵引けば、宮は藏王堂の大庭に並み居させ給ひて、大幕打揚げて最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頬さき、二の御腕、二箇處突かれさせ給ひて、血の流るゝこと瀧の如し。然れども立つたる矢をも抜き給はず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら、大盃三度傾けさせ給へば、木寺相摸四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫いて、宮の御前に畏り、「戈鋋劍戟を降らすこと電光の如くなり、磐石岩を飛ばすこと春の雨に相同じ。然りとはいへども、天帝の身には近づかで、修羅、彼が爲に破らる。」と、はやしを揚げて舞ひたる有樣は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが劍を抜いて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかゝげて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり。

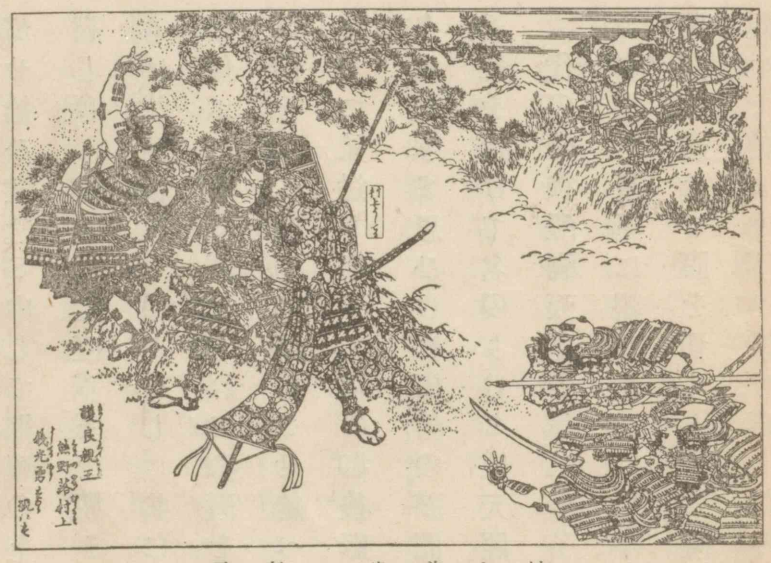
大手の合戰急なりと覺えて、敵味方の鬨の聲相交りて聞えける

天帝　帝釋天。
修羅　阿修羅の略。帝釋天と戰ふ魔王。
鴻門に會せし時　漢の高祖と楚の項羽とが鴻門に會した時、楚の項莊が劍を抜いて舞ひ高祖を刺さうとすると項伯も亦舞つて之を防いだ。高祖の臣樊噲は高祖の急を聞き圍を排して内に入り高祖を逃れ去らしめた。

が、げにも其の戰に自ら相當ること多かりけりと見えて、村上彥四郎義光、鎧に立つ所の矢十六筋、枯野に殘る冬草の風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前に參つて申しけるは、「追手の一の城戸いひがひなく攻破られつる間、二の城戸に支へて數刻相戰ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴の聲、すさまじく聞え候ひつるについて參つて候。敵既にかさに取上げて、味方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てん事今は叶はじと覺え候。未だ敵の勢を餘所へ廻し候はぬ前に、一方より打破つて、一先落ちて御覽あるべしと存じ候。但し後に殘り留つて戰ふ兵無くば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵何處迄も續きて追懸け進らせんと覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と御物具とを下し賜つて、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り進らせ候はん。」と

挿圖（義光奮戰）
大塔宮十津川を出で吉野に往かれる途中、芋瀬庄司が之を沮止したので、從臣の勸めにより姑く錦旗を預けて難を免れ給うたが、義光後れ至つて之を知り、憤激勇戰して錦旗を取り返すところ。

紀信
漢の高祖の臣。自ら漢王の車にのつて楚を欺きその間に高祖を脫出せしめた。後捕へられて煮られた。



村上義光の奮戰

申しければ、宮「爭でかさる事あるべき。死なば一所にこそともかくもならめ」と仰せられけるを、義光詞を荒らかにして、「かかる淺ましき御事や候。漢の高祖滎陽に圍まれし時、紀信、高祖の眞似をして楚を欺かんと請ひしかば、高祖これを許し給ひ候はずや。これ程にいふがひなき御所存にて、天下の大事を思召し立ちける事こそうたてけれ。はや、其の御物具を脫

がせ給ひ候へ。」と申して、御鎧の上帶を解き奉れば、宮、げにもとや思召しけん、御物具、鎧直垂まで脱ぎ替へさせ給ひて、「われ若し生きたらば、汝が後生を弔ふべし。　共に敵の手に罹らば、冥途迄も同じ岐に伴ふべし。」と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南へ向つて落ちさせ給へば、義光は二の城戸の高櫓に登り、遙かに見送り奉りて、宮の御後影の微かに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓の狹間の板を切りおとし、身を露して、大音聲を揚げて名のりけるは、「天照大神の御子孫神武天皇より九十六代の帝、後醍醐天皇の第二皇子一品兵部卿親王尊雲、逆臣に滅ぼされ、恨を泉下に報ぜん爲に、只今自害する有樣見置きて、汝等が武運忽ち盡きて腹を切らんずる時の手本にせよ。」と言ふまゝに、鎧を脱いで櫓より下へ投げ落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに練貫の二つ

尊雲　大塔宮護良親王。

小袖を押し膚脱いで、白く清げなる膚に刀を突立て、左の脇より右の側腹まで一文字に搔切つて、腸摑んで櫓の板に投附け、太刀を口に銜へて、内臥に成つてぞ伏したりける。

追手・搦手の寄手これを見て、「すはや、大塔宮の御自害あるは。我先に御首を賜はらん。」とて四方の圍を解いて一所に集る。其の間に宮は引違へて、天の川へぞ落ちさせ給ひける。（卷七）

六　千劍破城軍の事

千劍破の城の寄手は、前の勢八十萬騎に、また赤坂の勢、吉野の勢馳せ加はつて、百萬騎に餘りければ、城の四方二三里が間は、見物相撲の場の如く打圍んで、尺寸をもあまさず充ち滿ちたり。　旌旗の風に飜つて靡く氣色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、劍戟の日に映じて耀きける有樣は、曉の霜の枯草に布けるが如くなり。　大軍

天の川　吉野の奥、丹生川谷の南。

千劍破の城　河内國金剛山の一支脈の絶頂にあつた。

前の勢　最初から千劍破に向つてゐた關東軍を指す。

の近づくところには、山勢これがために動き、鬨の聲の震ふ中には、坤軸須臾に擺けたり。この勢にも恐れずして、僅かに千人足らぬ小勢にて、誰を頼み何をか待つともなきに、城中に耐へて防ぎ戰ひける楠木が心の程こそ不敵なれ。

この城、東西は谷深く切れて、人の上るべきやうもなし。南北は金剛山に續きて、しかも峰峙ちたり。されども、高さ二町ばかりにて、廻り一里に足らぬ小城なれば、何程のことかあるべきと、寄手これを見侮つて、はじめ一兩日の程は、向陣をも取らず、攻支度をも用意せず、われ先にと城の木戸口の邊まで、かづきつれてぞ上りたりける。城中の者共少しも騷がず、靜まり返つて、高櫓の上より大石を投げ懸け投げ懸け、楯の板を微塵に打碎いて漂ふところを、差詰め差詰め射ける間、四方の坂より轉び落ち、落ち重なつて、手負ひ、死

長崎四郎左衞門尉名は高資。

金澤右馬助名は貞將。

大佛奥州名は高直。

を致すもの一日が中に五六千人に及べり。長崎四郎左衞門尉軍奉行にてありければ、手負・死人の實檢をしけるに、執筆十二人、夜晝三日が間、筆をもおかず註せり。さてこそ、「今より後は、大將の御許なくして合戰したらんずる輩をば、却つて罪科に行はるべし。」と觸れられければ、軍勢暫く軍を止めて、先づ己が陣々をぞ構へける。

こゝに赤坂の大將金澤右馬助、大佛奥州に向つて宣ひけるは、「前日赤坂を攻め落しつること、全く士卒の高名にあらず。城中の構を推し出して、水を止めて候ひしによつて、敵程なく降參仕り候ひき。これを以て、この城を見候に、これ程僅かなる山の巔に用水あるべしとも覺え候はず。又あげ水なんどをよその山より懸くべき便も候はぬに、城中に水澤山ありげに見ゆるは、如何樣東の山の麓に流れたる谷水を夜々に汲むかと覺えて候。あはれ宗徒の人

兩大將　大佛高直・二階堂貞藤。
名越越前守　名は時有。

人一兩人に仰せ付けられて、この水を汲ませぬやうに御計らひ候へかし。」と申されければ、兩大將、「この儀然るべしと覺え候。」とて、名越越前守を大將として、その勢三千餘騎を指し分けて、水の邊に陣を取らせ、城よりおりぬべき道々に逆茂木を引きてぞ待ちかけける。

楠木は元來勇氣智謀相兼ねたる者なりければ、この城を拵へけるはじめ、用水の便を見るに、五所の祕水とて、峰通る山伏の祕して汲む水この峰にあつて、滴ること一夜に五斛ばかりなり。この水いかなる旱にも干ることなければ、形の如く人の口中を濡らさんこと相違あるまじけれども、合戰の最中は、或は火矢を消さんため、又喉の渴くこと繁ければ、この水ばかりにては不足なるべしとて、大きなる木を以て水舟を二三百打たせて、水を湛へ置きたり。又數百箇所造り竝べたる役所の軒に繼樋を懸けて、雨降れば雨垂を

少しも餘さず舟に受け入れ、舟の底に赤土を沈めて、水の性を損ぜぬやうにぞ拵へける。この水を以て、たとひ五六十日雨降らずとも、こらへつべし。その中に又、などかは雨降ることなからんと料簡しける智慮の程こそ淺からね。

千早城址

されば、城よりは強ちにこの谷水を汲まんともせざりけるを、水ふせぎける兵共、夜毎に機をつめて、今や〳〵と待ちかけけるが、はじめの程こそあれ、後には次第々々に心懈り氣緩まつて、「この水をば汲まざりけるぞ。」とて、用心の體少し無沙汰にぞなりにける。楠木これを見すまして、究竟の

射手を揃へて、二三百人夜に紛れて城よりおろし、まだ東雲の明け果てぬ霞がくれより押寄せ、水邊に詰めて居たるものども二十餘人斬り伏せて、透間もなく切つてかゝりける間、名越越前守耐へ兼ねて、本の陣へぞ引かれける。寄手數萬の軍勢これを見て、渡り合はせんと犇けども、谷を隔て尾を隔てたる道なれば、輙く馳せ合はする兵もなし。とかくしけるその間に、捨て置きたる旗・大幕なんど取持たせて、楠木が勢しづかに城中へぞ引き入りける。

その翌日、城の大手に、三本唐笠の紋書きたる旗と、おなじき紋の幕とを引きて、「これこそ皆昨日名越殿より賜はつて候ひつる御旗にて候へば、御紋付きて候間、他人のためには無用に候。御内の人人これへ御入り候ひて、召され候へかし。」といつて、同音にどつと笑ひければ、天下の武士どもこれを見て、「あはれ名越殿の不覺や。」と、口

三本唐笠の紋
名越氏の定紋。

口にいはぬものこそなかりけれ。

名越一家の人々この事を聞いて、安からぬことに思はれければ、「當手の軍勢ども一人も殘らず、城の木戸を枕にして討死をせよ。」とぞ下知せられける。これによつて、かの手の兵五千餘人、思ひ切つて討てども射れども用ひず、乘り越え〳〵、城の逆茂木一重引破つて、切岸の下までぞ攻めたりける。されども、岸高うして切り立つたれば、やたけに思へどものぼり得ず、たゞ徒らに城を睨み、忿を抑へて息つき居たり。この時、城の中より、切岸の上に横たへて置きたる大木十ばかり切つて落しかけたりける間、將棊倒しをする如く、寄手四五百人壓に打たれて死にけり。これにちがはんとしどろになつて騷ぐ所を十方の櫓より指し落し、思ふやうに射ける間、五千餘人の兵ども殘りすくなに討たれて、その日の軍は果てにけ

り。誠に志の程は猛けれども、たゞ仕出したることもなくて、若干討たれにければ、「あはれ、恥の上の損かな。」と、諸人口ずさみはなほ止まず。尋常ならぬ合戰の體を見て、寄手も侮りにくゝや思ひけん、今ははじめのやうに勇み進んで攻めんとする者もなかりけり。

長崎四郎左衞門尉この有樣を見て、「この城を力攻にすることは、人の討たるゝばかりにて、その功成り難し。たゞ取卷いて、食攻にせよ。」と下知して、軍を止められければ、徒然に皆耐へ兼ねて、花の下の連歌師どもを呼びくだし、一萬句の連歌をぞ始めたりける。

少し程經て後、正成「いでさらば、又寄手をたばかりて、居眠覺させん。」とて、芥を以て人だけに人形を二三十造つて、甲冑を着せ、兵仗を持たせて、夜中に城の麓に立て置き、前へ疊楯をつき並べ、その後にすぐりたる兵五百人を交へて、夜のほの〴〵と明けける霧の下より、同時に鬨をどつと作る。四方の寄手鬨の聲を聞いて、「すはや、敵の中より打出でたるは。これこそ敵の運の盡くる所の死狂ひよ。」とて、我先にとぞ攻め合はせける。城の兵豫ねてたくみたることなれば、矢軍ちとするやうにして、大勢相近づけて、人形ばかりを木隱れに殘し置いて、兵は皆次第々々に城の上に引き上る。寄手人形を實の兵ぞと心得て、これを討たんと相集る。正成所存の如く敵をたばかり寄せて、大石を四五十、一度にばつと發す。一所に集りたる敵三百餘人矢庭に打殺され、半死半生のもの五百餘人に及べり。

軍果ててこれを見れば、あつぱれ大剛の者かなと覺えて、一足も引かざりつる兵、皆人にあらで、藁にて造れる人形なり。これを討たんと相集りて、石に打たれ矢に中つて死せるも高名ならず。又

これを危みて進み得ざりつるも、臆病の程顯れて言ふ甲斐なし。たゞとにもかくにも萬人の物笑とぞなりにける。（卷七）

七　正成兵庫へ下向の事

尊氏卿・直義朝臣大勢を率して上洛の間、要害の地において防ぎ戰はんために、兵庫に引退きぬる由、義貞朝臣早馬をまゐらせて內裏に奏聞ありければ、主上大いに御騷あつて、楠木判官正成を召されて、「急ぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力を合せて、合戰を致すべし。」と仰せられければ、正成畏つて奏しけるは、「尊氏卿すでに筑紫九國の勢を率して上洛し候ふなれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらん。味方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乘つたる大勢に懸けあつて、尋常の如くに合戰を致し候はば、味方決定うち負け候ひぬと覺え候ふなれば、新田殿をも京都へ召し候ひて、前のごとく山門へ臨幸

大勢を率して　延元元年尊氏兄弟が西國の軍を率して東上した。
兵庫に引退きぬ　此の時まで義貞は播磨國加古川の西の岡に陣してゐた。
主上　後醍醐天皇。
山門　比叡山延暦寺。

なり候ふべし。正成も河內へ罷り下り候うて、畿內の勢を以て川尻をさし塞ぎ、兩方より京都を攻めて兵粮を疲らかし候ほどならば、敵は次第に疲れておち下り、味方は日々に隨つて馳集り候ふべし。その時に當つて、新田殿は山門よりおし寄せられ、正成は搦手にて攻めのぼり候はば、朝敵を一戰に滅すことありぬと覺え候。新田殿も定めてこの料簡候とも、路次にて一軍もせざらんは、無下に云ふ甲斐なく、人の思はんずるところを恥ぢて兵庫に支へられたりと覺え候。合戰はとてもかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ。よく〳〵遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候。」と申しければ、「誠に軍旅の事は兵に讓られよ。」と諸卿僉議ありけるに、重ねて坊門宰相清忠申されけるは、「正成が申すところもそのいはれありといへども、征伐のためにさし下されたる節度使、未だ戰をな

川尻　淀川の川尻。
清忠　參議藤原清忠。
節度使　新田義貞。
一年の內に　建武三年（延元元年）正月尊氏が東國の兵を率ゐて入京し車駕延暦寺に幸せられた。

去年　建武二年。
東八箇國　關東八ケ國。

さざる前に帝都を捨て、一年の内に二度まで山門に臨幸ならん事、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふところなり。たとひ尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を從へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。およそ戰の始より、敵軍敗北の時に至るまで、味方小勢なりと雖も、毎度大敵を攻め靡けずといふ事なし。これ全く武略の勝れたるところにはあらず、ただ聖運の天にかなへる故なり。然ればたゞ戰を帝都の外に決して、敵を鈇鉞の下に滅さん事、何の仔細か有るべきなれば、たゞ時をかへず楠木罷り下るべし。」とぞ仰せ出されける。

櫻井驛址

五月十六日　延元元年（一九九）。

櫻井　大阪府三島郡島本村にある。山崎街道の一驛。

正成「この上はさのみ異議を申すに及ばず。」とて、五月十六日に都を立つて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成これを最後の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありとて櫻井の宿より河内へ返し遣はすとて、庭訓を遺しけるは、「獅子、子を產んで三日を經る時、數千丈の石壁よりこれを投ぐ。その子、獅子の機分あれば、教へざるに中よりはね返りて、死する事を得ずといへり。況や汝既に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、わが教誡に違ふこと勿れ。今度の合戰天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見んことこれを限と思ふなり。正成既に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の世になりぬと心得べし。然りと雖も、一旦の身命を助らん爲に、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死に殘つてあらん程は、金剛山の邊

にひきこもつて、敵寄せ來らば、命を養由が矢先に懸けて、義を紀信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずる。」と泣く〳〵申し含めて、各、東西へ別れにけり。

昔の百里奚は、穆公晉國を伐ちし時、戰ひの利なからんことを鑑みて、その將孟明視に向つて今を限の別を悲しみ、今の楠判官は、敵軍都の西に近づくと聞きしより、國必ず滅びんことを愁へて、その子正行を留めて、なき跡までの義を勸む。彼は異國の良弼、これは我が朝の忠臣、時千載を隔つと雖も、前聖後聖一揆にして、あり難かりし賢佐なり。（卷十六）

養由　周末の人。射をよくし百歩離れて柳葉を射て百發百中したといふ。

紀信　（大塔宮熊野落の條にある。）

昔の百里奚　史記に秦の穆公が兵を發し百里奚の子孟明視と蹇叔の子西乞術とを將としたところ出發の日に百里奚と蹇叔とがこれを哭したことが載つてゐる。

前聖後聖　得レ志行ニ于中國一、若レ合ニ符節一。先聖後聖其揆一也。（孟子）

八　正成兄弟討死の事

楠木判官正成、舍弟帶刀正季に向ひて申しけるは、「敵前後を遮つて味方は陣を隔てたり。今は遁れぬ處と覺ゆるぞ。いざや先づ前なる敵を一散らし追ひまくつて、後なる敵に戰はん。」と申しければ、正季「然るべく覺え候。」と同じて、七百餘騎を前後に立てて大勢の中へぞ駈入りける。

左馬頭の兵ども菊水の旗を見て、よき敵なりと思ひければ、取籠めてこれを討たんとしけれども、正成・正季東より西へ破つて通り、北より南へ追ひ靡け、よき敵と見るをば馳せ並べて組んで落ちては首を取り、合はぬ敵と思ふをば一太刀打つてかけ散らす。正成と正季と七度合ひて七度分る。其の心偏に左馬頭に近づき組んで討たんと思ふにあり。遂に左馬頭の五十萬騎、楠木が七百餘騎にかけ靡けられて、また須磨の上野の方へぞ引返しける。直義朝臣の乘られたりける馬、矢尻を蹄に踏立てて右の足を引きける間、楠木が勢に追つめられて、已に討たれ給ひぬと見えける處に、藥師

左馬頭　足利直義。

須磨の上野　須磨の上方をいふ。

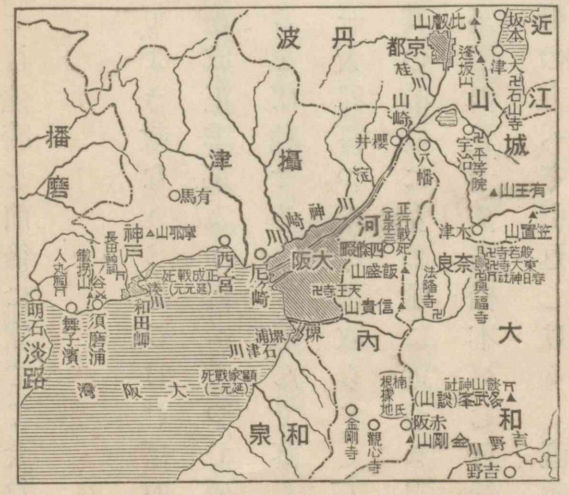
蓮池　兵庫縣武庫郡長田の西大字池田にある。

むながい　鞅。馬の胸より鞍にかける組緒。

將軍　足利尊氏。

寺十郎次郎只一騎、蓮池の堤にて返し合せて、馬より飛んでおり、二尺五寸の小長刀の石つきを取延べて、懸る敵の馬の平頸、むながいの引廻し、切つては刎ね倒し刎ね倒し、七八騎が程切つて落しける其の間に、直義は馬を乘替へて遙々落延び給ひけり。

左馬頭、楠木に追立てられて引退くを、將軍見給ひて、「新手を入替へて、直義討たすな。」と下知せられければ、吉良・石堂・高・上杉の人々、六十餘騎にて湊川の東へ駈出でて、跡を切らんとぞ取卷きける。正成・正季また取つて返



近畿地方

九界　迷悟兩界の十界の中佛界を除いたもの。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩。

して此の勢にかゝり、懸けては打違へて殺し、懸け入つては組んで落ち、三時が間に十六度まで鬪ひけるに、其の勢次第々々に滅びて、後は纔に七十三騎にぞなりにける。此の勢にても打破つて落ちば落つべかりけるを、楠木京を出でしより、「世の中の事今はこれ迄。」と思ふ所存ありければ、一足も引かず戰つて、氣已に疲れければ、湊川の北に當つて在家の一村ありける中に走り入つて、腹を切らん爲に鎧を脱いで、其の身を見るに、斬疵十一箇所までぞ負ひたりける。此の外七十二人の者共も、皆五箇所三箇所の疵を被らぬ者はなかりけり。楠木が一族十三人、手の者六十四人、六間の客殿に二行に並みゐて、念佛十返ばかり同音に唱へて、一度に腹をぞ切つたりける。正成座上に居つゝ舍弟の正季に向つて、「抑、最後の一念に依つて善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願なる。」

と問ひければ、正季から〳〵と打笑ひて、「七生まで只同じ人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存じ候へ。」と申しければ、正成世に嬉しげなる氣色にて、「罪業深き惡念なれども、われもかやうに思ふなり。いざさらば同じく生を替へて、此の本懷を達せん。」と契つて兄弟共に刺違へて、同じ枕に臥しにけり。　橋本八郎正員・宇佐美河内守正安・神宮寺太郎兵衞正師・和田五郎正隆を始として、宗徒の一族十六人、相隨ふ兵五十餘人、思ひ〳〵に並みゐて一度に腹をぞ切つたりける。　菊池七郎武吉は兄の肥前守が使にて須磨口の合戰の體を見に來りけるが、正成が腹を切る所へ行合ひて、「おめ〳〵しく見捨ててはいかゞ歸るべき。」と思ひけるにや、同じく自害をして炎の中に臥しにけり。

肥前守
菊池武重。
武時―武重
　　―武吉
　　―武光―武政―
　　―武朝
元弘
元弘元年後醍醐帝笠置に幸して正成を召された。

抑、元弘より以來忝くも君に憑まれ進らせて、忠を致し功に誇る者幾千萬ぞや。　然れども此の亂又出で來て後、仁を知らぬ者は朝恩を捨てゝ敵に屬し、勇なき者は苟も死を免れんとて刑戮にあひ、智なきものは時の變を辨ぜずして道に違ふことのみありしに、智仁勇の三德を兼ねて死を善道に守るは、古より今に至るまで、この正成ほどの者は未だ無かりつるに、兄弟共に自害しけるこそ、聖主再び國を失ひて逆臣横しまに威を振ふべき其の前表の驗なれ。

（卷十六）

聖主
後醍醐帝。
逆臣
尊氏。

九　主上崩御の事

延元三年八月九日より、吉野の主上御不豫の御事ありけるが、次第に重らせたまふ。　醫王善逝の誓約も祈るにその驗なく、耆婆・扁鵲が靈藥も施すにその驗おはしまさず、玉體日々に消えて、晏駕の期遠からじと見えさせたまひければ、大塔の忠雲僧正御枕に近づ

主上
後醍醐天皇。
醫王善逝
藥師如來をいふ。
耆婆
印度古代の名醫。
扁鵲
支那古代の名醫。
忠雲僧正
中院光忠の子。

神路山　伊勢神宮の神苑より遠く南につづいた山。
石清水　石清水八幡宮。京都府綴喜郡男山にある。
三明　聖者の有する三種の智明。過去・現在・未來の三つに通達すること。
三界　一切衆生の生死輪廻する世界。即ち欲界、色界、無色界。

きたてまつりて、涙を押へて申されけるは、「神路山の花再び開くる春を待ち、石清水の流つひに澄むべき時あらば、さりとも佛神三寶も捨てまゐらせらるゝことはよも候はじとこそ存じ候ひつるに、御脈既に變らせたまひて候よし、典藥頭驚き申し候へば、今は偏に十善の天位を捨て、三明の覺路に赴かせたまふべき御事をのみ思し召しさだめられ候べし。さても最後の一念によつて、三界に生を引くと經文に說かれて候へば、萬歲の後の御事、よろづ叡慮にかゝり候はんことをば悉く仰せ置かれ候うて、後生善所の望をのみ御心にかけられ候べし。」と申されたりければ、主上くるしげなる御息を吐かせ給ひ

後醍醐天皇

妻子珍寶……大集經十四、虛空藏菩薩品に出てゐる。
三良　穆公の卒した時從つて死んだ者が百七十七人に及んだ。中に秦の良臣子輿氏の三子（奄息・仲行・鍼虎）があつたので秦の人は黃鳥の詩を歌つてこれを悼んだ。（史記秦本紀）
始皇帝　始皇帝を驪山に葬る時、奇器珍寶を悉く冢中に埋めた。（史記始皇本記）
第七の宮　義良親王。後に後村上天皇。
法華經　姚秦の沙門鳩摩羅什の譯。八卷二十四品より成る。

て、「『妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者。』これ如來の金言にして、平生の朕が心にありしことなれば、秦の穆公が三良を埋み、始皇帝の寶玉を隨へしこと、一も朕が心に取らず。たゞ生々世々の妄念ともなるべきは、朝敵を悉く亡ぼして、四海を泰平ならしめんと思ふばかりなり。朕すなはち早世の後は、第七の宮を天子の位に卽け奉りて、賢士忠臣事を謀り、義貞・義助が忠功を賞して、子孫不義の行なくば、股肱の臣として天下を鎭むべし。之を思ふ故に、玉骨はたとひ南山の苔に埋もるとも、魂魄は常に北闕の天を望まんと思ふ。若し命を背き義を輕んぜば、君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらじ。」と、委細に綸言を遺されて、左の御手に法華經の五の卷を持たせ給ひ、右の御手には御劍を按じて、八月十六日の丑の刻に、遂に崩御なりにけり。

悲しいかな、北辰位高くして、百官星の如くに列るといへども、九泉の旅の路には供奉つかまつる臣一人もなし。いかんせん、南山の地僻にして、萬卒雲の如くに集るといへども、無常の敵の來るを ば禦ぎ止むる兵更になし。たゞ中流に舟を覆して一壺の涙に漂ひ、暗夜に燈消えて五更の雨に向ふが如し。（卷二十一）

中流に舟を覆し　中河失レ船ヲ一壺モ千金。（櫱冠子）

一〇　正行吉野へ參る事

京勢、雲霞の如く、淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族うち連れて、十二月二十七日、吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、「父正成尪弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を安め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻めのぼり候間、危きを見て命を致すところ、かねて思ひ定め

京勢　高師直弟師泰の兵。
淀　京都府（山城）久世郡にある今の淀町。
八幡　同綴喜郡にある今の八幡町。
十二月二十七日　正平三年（一三〇八）。
四條中納言　藤原隆資。吉野の忠臣。四條畷の戰に正行を援けた。

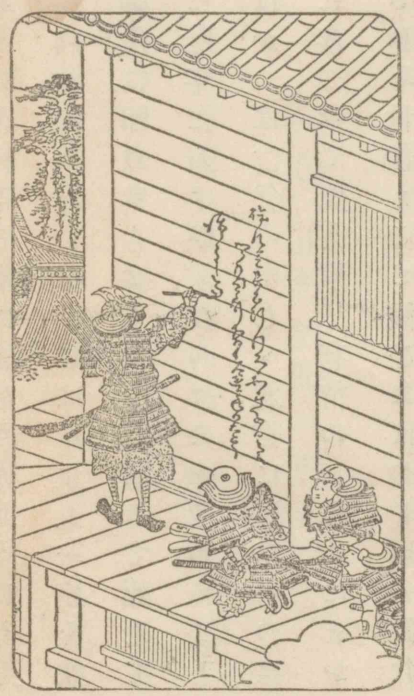
候ひけるかによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一歳にまかり成り候ひしを、合戰の場へも伴なはで河内へ歸し、『死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡ぼし、君を御代に卽け參らせよ。』と申し置きて死して候。然るに正行・正時既に壯年におよび候ひぬ。この度われと手を碎き合戰仕り候はずば、かつは亡父の申しゝ遺言に違ひ、かつは武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふにまかせぬならひにて、病に侵され、早世仕ること候ひなば、たゞ君の御ためには不忠の身となり、父のためには不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰に懸け合ひ、身命をつくし合戰つかまつて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候ふか、正行・正時が首を彼等に取られ候ふか、その二つのうちに、戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜

危きを見て命を致し　士見レ危ヲ致レ命ヲ。見レ得ヲ思ヒ義ヲ。（論語）
正時　正行の弟。
師直　高師直。武藏守といふ。尊氏の臣。師泰はその弟。

主上　後村上天皇。
南殿　紫宸殿。こゝは吉野皇居の正殿。
兩度の戰　正平二年八月、藤井寺に細川顯氏を破り、同十二月阿部野に山名時氏を破つた。

し奉らんために、參內仕つて候。」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に現れければ、傳奏いまだ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞぬらされける。

主上すなはち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顏ことに麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすがへすも神妙なり。大敵いま勢をつくして向ふなれば、今度の



正行辭世を書す

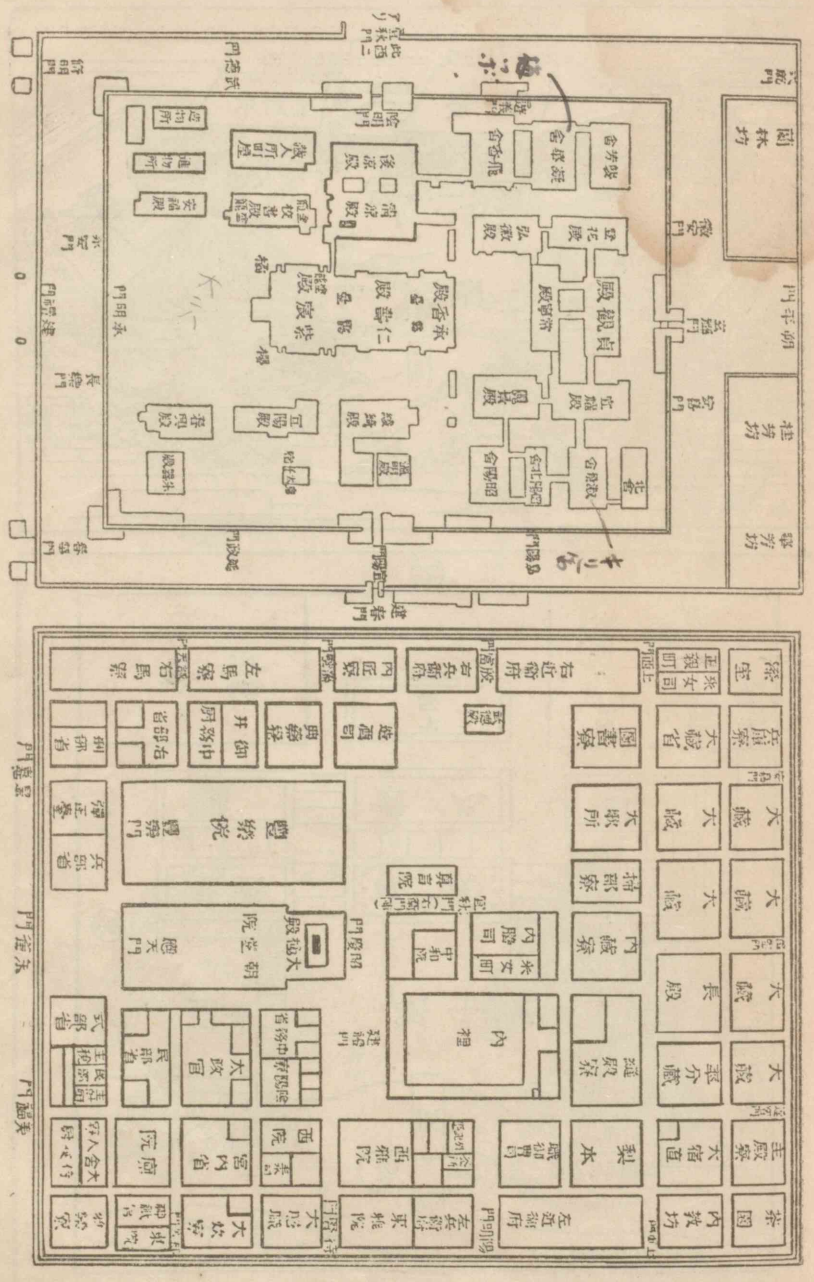
西河　一本に「西阿」とある。
先皇　後醍醐天皇。
如意輪堂　後醍醐天皇塔尾御陵の少し下なる山腹にある。其本堂は同天皇の御影殿。

合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずることは、勇士の心とする所なれば、今度の合戰手を下すべきにはあらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんがためなり、退くべきを見て退くは、後を全うせんがためなり。朕汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし。」と仰せいだされければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答におよばず、たゞこれを最後の參內なりと思ひさだめて退出す。正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衞・同紀六左衞門・子息二人・野田四郎・子息二人・楠木將監・西河・子息・關地良圓以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各、名字を過去帳に書きつらねて、その奧に、

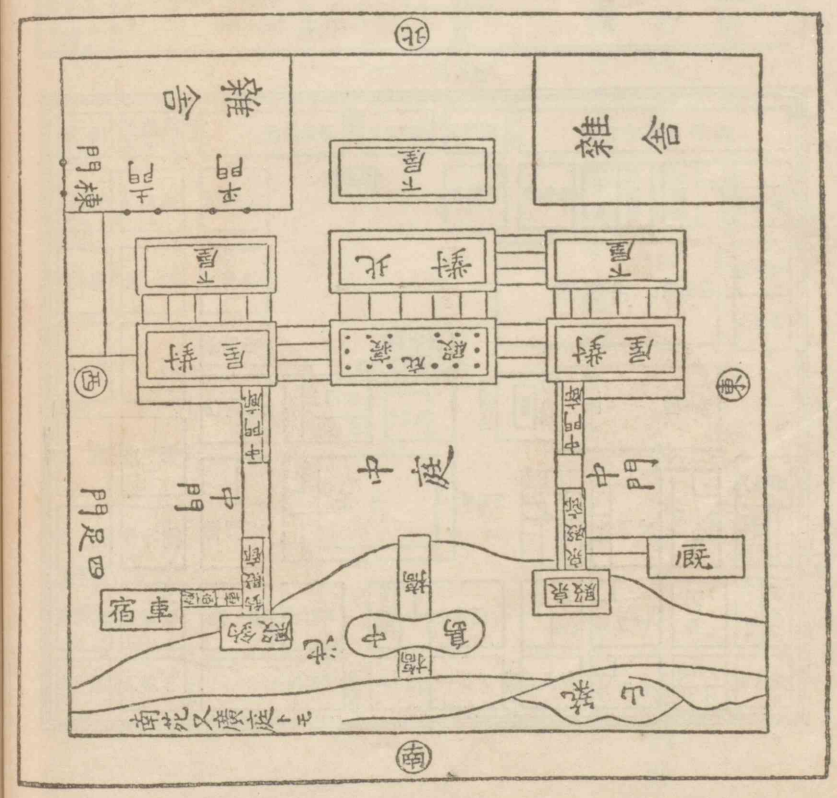
かへらじとかねて思へば梓弓
なき數にいる名をぞとゞむる

と、一首の歌を書留め、逆修の爲とおぼしくて、各、鬢髮を切つて佛殿に投入れ、その日吉野をうち出でて、敵陣へぞ向ひける。（卷二十六）

國語讀本 卷六 終

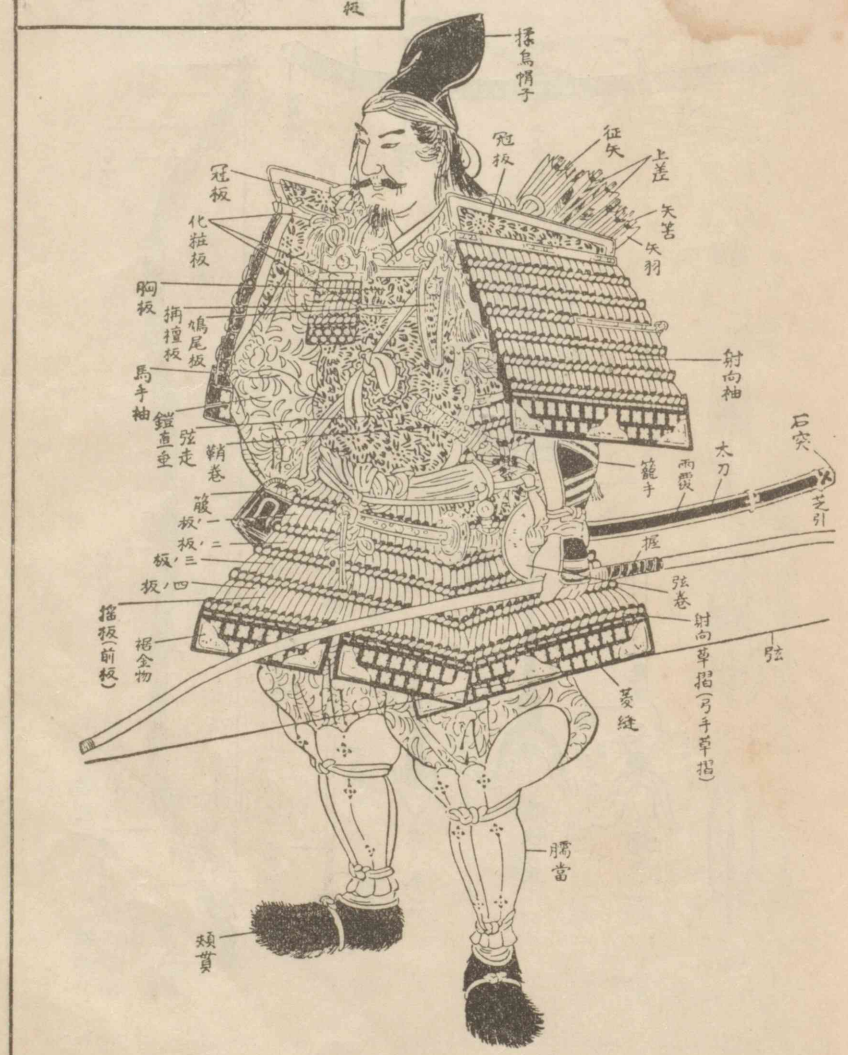


下屋
西對屋
寢殿
東對屋
廊
中門
廊
中門
泉殿
釣殿
中島
池
東宮
山

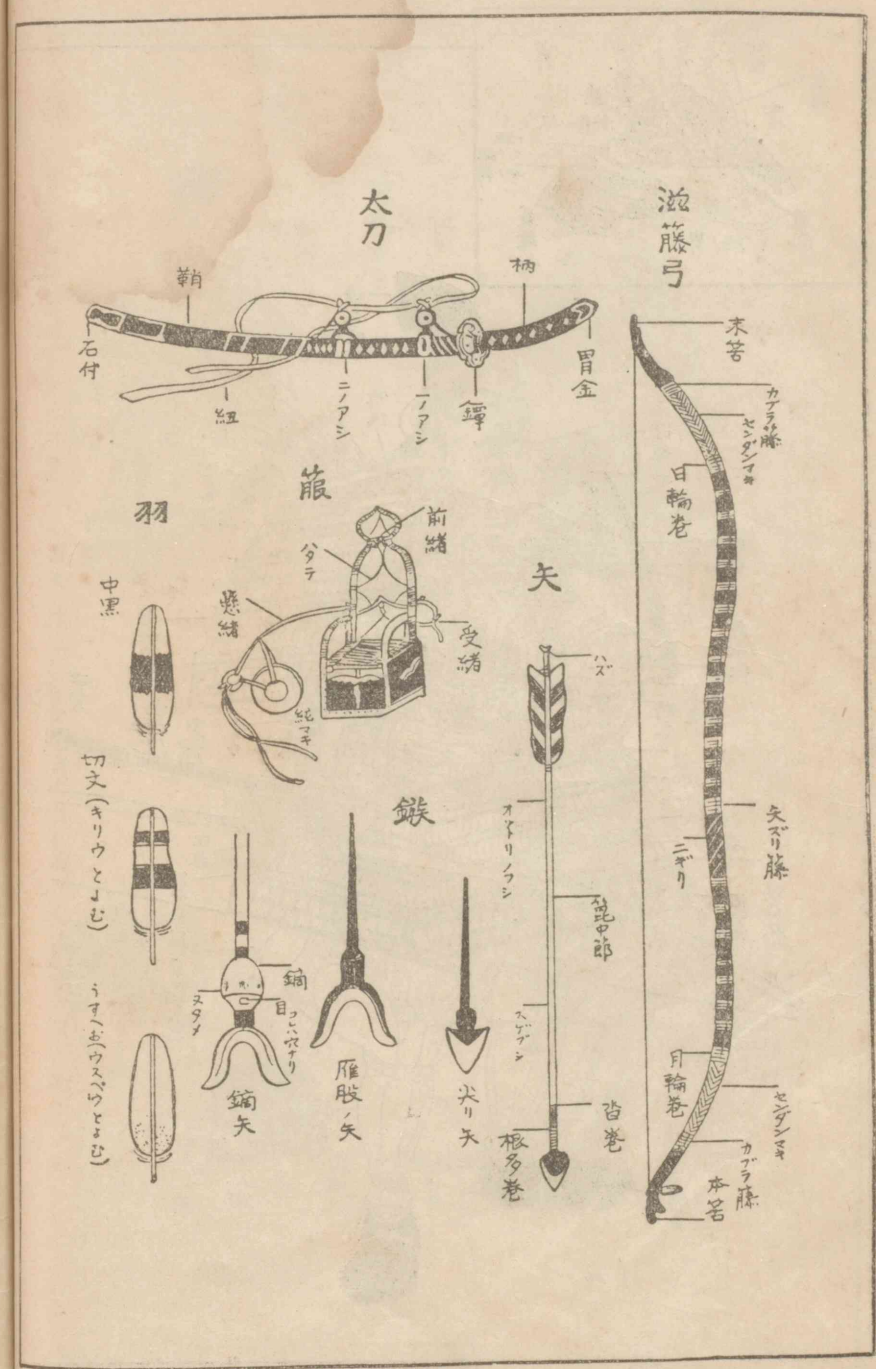

北
會議
會議
平門
上門
月華門
不屋
不屋
對北
屋對
屋對
殿・花園
殿中
中門
中門
殿中
廊
殿泉
島中池
橋
橋
車宿
殿釣
月見の門
山
東
西
南

束帶（前）
冠
垂纓
懸緒
白小袖（可襟）
黑袍
笏
蒔繪劍
單
平緒
欄
袴
表袴
沓
隨身（前）
細纓
懸緒
闕腋袍（金襴）
野飯兒鞘
赤大口
平緒
表袴
同（後）
石帶ノ上手
石帶
平緒
ハコエヲ丸ル（是ヲ格ヲ丸ト受シリツクルトモ云）
立烏帽子直衣（夏）
立烏帽子
單
衣
蝙蝠
腰帶
色二藍
奴袴

冑
鍬形
八幡座
真向
吻返
菊座
星
鋲付ノ板
二ノ板
三ノ板
四ノ板
眉庇
緒ノ冑
菱縫ノ板


揉烏帽子
冠板
征矢
上差
矢筈
矢羽
冠板
化粧板
胸板
鳩尾板
馬手袖
鎧直垂
弦走
鞘巻
射向袖
石突
太刀
籠手
雨覆
芝引
弦巻
射向草摺(弓手草摺)
菱縫
腰當
類當
弦
籠手ノ板
二ノ板
三ノ板
四ノ板
揺板(前板)
揺金物

直垂
風折
懸緒
白小袖
小サ刀
蝙蝠
狩衣 武家
蹈鞴
白無垢
袴
腰
袖括
冠
巾子
甲
垂纓
竹簪
磯
巻纓
緌
冠
風口
眉
鍋
正装
烏帽子
水干
衣
打衣
単
表衣
袴
引帽
引帽
帽子



昭和八年二月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

大正十三年十二月十六日印刷
大正十三年十二月十九日發行
大正十四年二月二十一日訂正再版印刷
大正十四年二月廿四日訂正再版發行
昭和三年十一月一日改訂印刷
昭和三年十一月四日改訂發行
昭和四年三月十二日改訂再版印刷
昭和四年三月十五日改訂再版發行
昭和七年十月廿二日改訂三版印刷
昭和七年十月廿五日改訂三版發行
昭和八年二月廿一日改訂四版印刷
昭和八年二月廿三日改訂四版發行

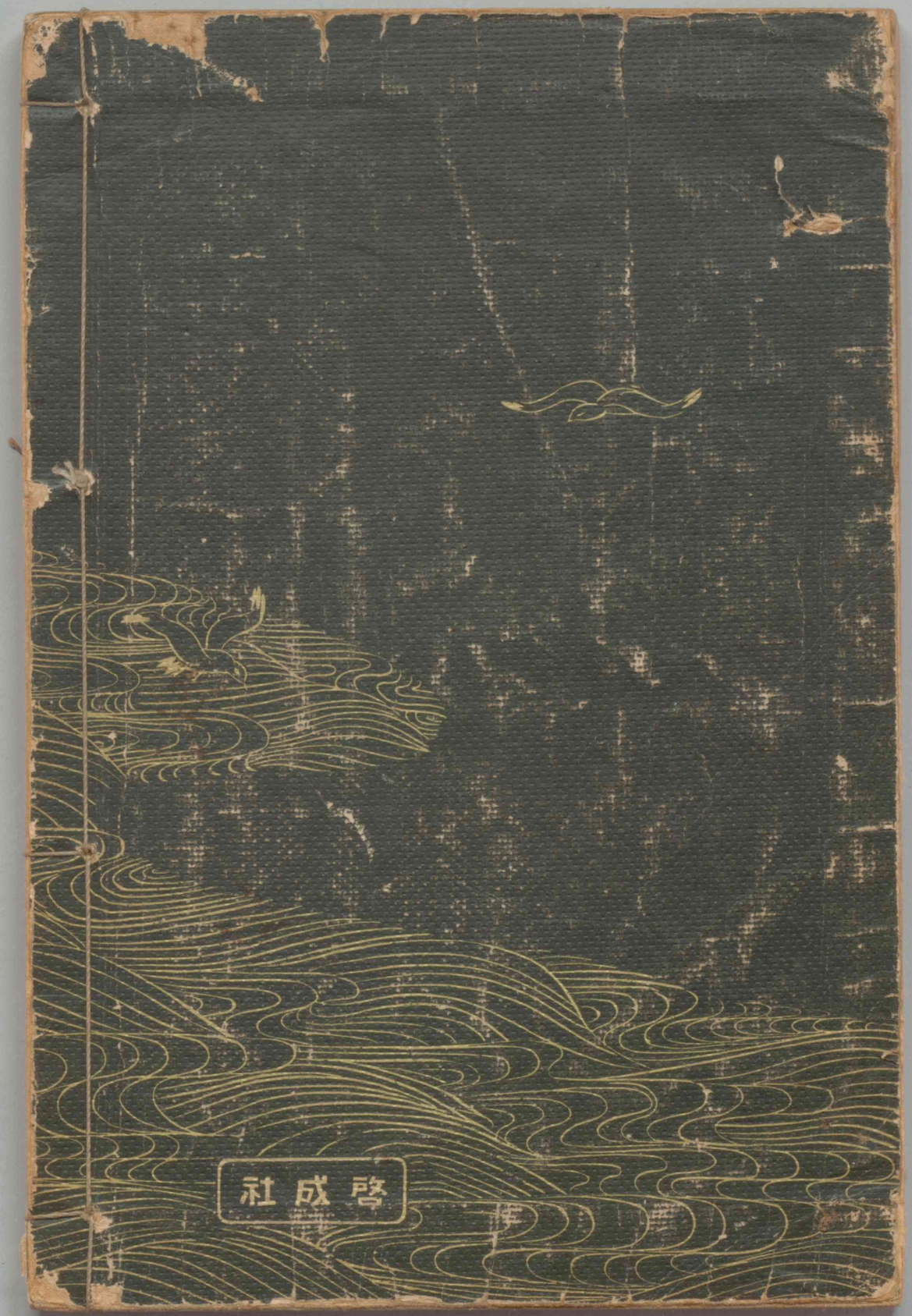
國語讀本新制版
（各卷 定價金六十錢）

編者 上田萬年
同 榮田猛猪
同 鹽野新次郎

發行兼印刷者 株式會社啓成社
右代表者 布津純一

印刷所 啓成社印刷部

發行所 東京市麹町區丸ノ内三丁目六番地
株式會社 啓成社
電話丸ノ内(23)二六八六番
振替東京一二〇五五番


啓成社